

世界の敵になるために

黒川清流

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

旧題【神器独唱シンフォギア】

僕は転生者：のようだ

本当に転生者なのかは分からない

でも知っているなら、救える人は救いたい

だから、僕は戦う：世界の敵になつてでも

自己満足のような何か

仮面ライダー要素もあります

原作キャラとカップリングを作るかは悩み中です  
必須タグは一応

# 目

# 次

始動、アライン	激突、二課VSアライン
邂逅、ツヴァイウイング	激戦、アライン VS OTONA
あたたかい人	99
奏でる羽と風鳴る翼	登場、ダ・カーポ
絶唱、OVERLOAD	協力、記憶との違い
前日、主人公の決意	閑話、一つの結末
■■、■・■■と■■■■	星空、月と太陽と笑う神
開始、物語の始まり	入店、ラスボスだらけの喫茶店
覚醒、三人目のガングニール	130 122 116 109 103
遭遇、三人の奏者	88
紹介、特異災害対策機動部	
歌唱、前世の歌	

激突、二課VSアライン  
激戦、アライン VS OTONA  
99  
登場、ダ・カーポ  
協力、記憶との違い  
閑話、一つの結末  
星空、月と太陽と笑う神  
入店、ラスボスだらけの喫茶店  
130 122 116 109 103  
88

# 始動、アライン

とある外国のとある施設の前に僕はいた

自己紹介をしよう、僕の名前は黒野飛鳥。

14歳

僕は転生者だ

といつてもこの記憶が本当に僕のものかは分からない

ある時、ふつと夢を見るように。まるでテレビでも見てているかのようなこの記憶。

戦記絶唱シンフォギア、それがこの世界の名前だ

正直この知識が本物か分からぬ、でも類似点も見つけてしまったのでとりあえず前世の記憶としておく

この話は立花響という主人公を中心とし、歌を歌うことで召喚したものを身にまとイノイズと呼ばれる災害相手に奮闘する物語だ。

死んだ記憶も前世の記憶もほとんどないけど

どうせ知っているなら救えるものも救いたいと思うし、行動を起こしたいと思つてい

た

だからここに来た

しかし、なぜこの施設の場所が分かつたのかが分からぬ。まるで思い出すかのよう  
にこの場所は知つていた。この場所は外国なのだが行くのは思つたよりも簡単に行け  
た。転生特典とでもいうのかこのとある力で、そう思いながら自分の腰についている機  
械をなでる

見た目は前世（便宜上そう記しておく）でみた仮面ライダーのベルト、カートリッジ  
を差し込んで押し込むタイプ、機構は仮面ライダードライブのマツハのベルトに近い。  
カートリッジはアマゾンズのNEOが使つてたあれに近いかも、インジエクターだつ  
け。注射器みたいに押し込めないけど。

これを差し込んで上から押して嵌め込めば変身完了、全身が装甲に包まれ凄まじい力  
を得る。

とある事情で南米に行つた際、数回使つことがあるが戦闘能力は凄まじかつた。  
これならこれから起ることも対処できるだろう  
かすかに震える手を押さえ、深く深呼吸をした

「…いこう

そう呟くと同時にガジェットについているボタンを押した

『BEYONHERLD GUNG NIR!!』

バツという音が鳴りそうなほどにボーズをとりガジェットをドライバーに押し込む

ガチャーン、キュイーンという電子音にも似た音と共に僕は呟いた

「…変身」

『⋮ TYPE TRON』

掛け声とともにこぶしでドライバーの上部を叩くと更に音声が鳴り、全身が光に包まれ全身にオレンジと黒で構成された装甲で包まれる。等身はほとんど大人の等身になる

そう、このガジェットの名前はギャングニールという。戦闘スタイルは素手

右のこぶしが少しごつく、何かを差し込めるような武装が付いている

僕が今回ここに来た目的は1つ

・セレナ・カデンツアヴァナ・イヴの救出

原作開始より六年前、正確な日付なんて分からぬのに何故か分かつた。今日だとうことが

「戦闘開始」

助けなきや…みんなを助けなきや

ネフイリムを倒すためにセレナは絶唱を歌う

「G a t r a d i s b a b e l z i g g u r a t e d e n a l E m u s t o l  
r o z e n f i n e e l b a r a a l 」」

これでいい…こうすれば皆が：

「悪いがその予定はキャンセルだ」

このスーツにはボイスチェンジャーが搭載されているので声が低くなっている

僕はそういうとセレナの肩を引き、歌を中断させる

「――z i z z l ・・・えつ、だ、誰?!」

「話はあとだ」

この口調難しいなあ・・・でも少し強そうな感じにしないといけない、今後のために

この姿も記録されるだろうし。早くネフイリムを無力化しないといけない

僕はベルトからガジエットを抜き、こぶしの部分についている差込口にガジエットを差し込み、銃の弾を装填するようにスライドさせる。

ガシュンツという音と共にガジェットが装填され、音声が鳴る

『GUNGNIR!! CRITICAL STRIKE!!!』

「ハアアアアアアアア…ハアツ！」

こぶしをネフィリムにぶつけると同時にこぶしの当たった地点が爆ぜる

そのままネフィリムを壁まで吹き飛ばし壁に縫い付ける、そして僕はヒビキさんのように敬礼のような仕草をして呟いた。

「…ピリオドだ」

その瞬間ネフィリムがいた地点で大爆発が起ころ、すると基底状態になつたのか行動が停止した

「…終わりか」

「あ、ありがとうございます…な、なんで私を…」

剣を仕舞うとギアをまとつたセレナがこちらに向けて話しかけてくる  
なんて返そう…えつと…今の見た目は大人だから…それっぽいことを…  
「…幼き命を無為に散らすのが好きではないだけだ」

「セレナツ！」

奥から幼いマリアが現れてセレナに抱き着く

そろそろ逃げないとなんかややこしいことになりそう、僕はここから脱出しようと二

人に背を向ける

するとセレナから声をかけられた。

「あの!!お名前を……」

……名前、これ黒野飛鳥つていうわけにはいかないよね

えつと名前：仮面ライダーガングニール…？

聖遺物と同じ名前はダメだよね、えつと…シンフォギアだから音楽用語で…あ、確かに聞いたことがある…えつと、確かに…

「…アライン、仮面ライダーアラインだ」

「仮面ライダー…」

「アライン…」

「さらばだ」

それと同時に侵入してきた穴へと飛び立つた

# 邂逅、ツヴァイウイング

あのマリアとセレナの事件から4年たつた、これからも戦いが起ることが分かつているので必死に訓練している。親も海外で仕事をしているので一人暮らし、特に疑問に思われることはなかつた。

「ふう…」

走り込みを終えて一息つく

高校卒業も間近、大学にも合格し。しばらくは特にすることもない暇な時期、最近行つていることはトレーニングと映画鑑賞だ。

二課の所長、風鳴弦十郎が言つていた「飯食つて映画見て寝るッ！男の鍛錬は、そいつで十分よッ！」つてやつを試してみたのだ、もちろん怖いから最低限の鍛錬はしてたけど。

その結果

全く筋肉の付かない細身の体なのに超人的な力を手に入れた。何を言つてか分からぬと思うけど僕にも分からぬ、この世界のせいなの？必死こいて鍛錬してた二年間を返して

まあ、見るだけじゃダメみたいけど。見るだけで鍛錬になるなら映画好きはみんなムキムキだからね

でも筋肉はもうちよつとつけたかつたなあ・肉つかないんだよね、この体  
「ど、もう時間か。そろそろ向かわないと」

そろそろアニメでいう第一話が始まつてしまふ

僕は軽くシャワーを浴びると会場へとバイクで急いだ、バイクの免許もちゃんと取りました。仮面ライダーはバイクが大事だからね。

というかこのバイクも普通と違う。変身するとバイクの形状が変化するのだ、カメンライダードラゴンナイトのように、普通にお店で買つたやつなんだけどなあ・おつと会場についた、凄い人だ

今日はツヴァイウイングのコンサートだ

会場には様々な人がひしめき合つており、まだ歌も始まつていないのですでに大きな歓声が聞こえる

でも、僕は知つてゐる。この後、この会場が悲鳴と絶望で埋め尽くされることに地下ではネフシユタンの起動実験だったかな？が始まり暴走して爆発、ノイズが現れて大混乱

僕が今回ここに来た目的は3つ

・この会場での被害者を可能な限り減らす

・絶唱を使う直前にギャングニールを奪い、天羽奏を生存させる

・風鳴翼に強い敵対心を抱かせる

被害者を減らすのは可能なら程度

避難する用の通路をいくつか作る、といつても大穴を開けてそこから逃げられるよう  
にするだけだけ

これはアラインの力があれば可能、それと可能な限りの人を出口近くまで移動させ  
る、足をくじいたりした人とかをね

次に絶唱を使う前に天羽奏を助ける

これは立花響がギャングニールの破片を食らって絶唱を使うまでの間、ギャングニールを  
奪う理由は天羽奏の身体がかなりきつい状況だと聞いていたのでこのアラインの他の  
力を使おうと思っている。

ギャングニールを奪わなければこれからも彼女はlinkerを使い戦いに出向くで  
あろう、それを防ぐために奪う

風鳴弦十郎が取られた責任をとつて辞任とかにならなきや良いけど

最後に風鳴翼に敵愾心を抱かせる

これは風鳴翼の精神力を向上させるために行う

おそらく心の支えである天羽奏に對して攻撃をすれば大丈夫だと思う、しばらく活動も出来ないよう天羽奏を攻撃しなければいけないかも知れない

この目標の優先順位は2，3，1

特に2は絶対に成功させないと

そのようなことを考えているとツヴァイウイングの二人が登場し、観客のボルテージはMAXになる

それと同時に、僕はこの物語の主人公。立花響を見つけた。本編ではあんまり乗り気ではなかつたようだがこの熱気に充てられたのか笑顔を見せている。

曲もそろそろ終わりを迎える：そして始まる

僕はジヤケットからドライバーを取り出し、腰に装着した。それと同時に会場の中央で起きる爆発、上がる悲鳴。逃げ出す人々、そこら中から巻き上がる粉塵。僕も思わず腰を抜かしてしまいそうになる。かすかに震える手を押さえ、全身に土煙が包み込まれたと同時にガジェットのボタンを押し、差し込んだ。

## 『BEYONHERLD GUNGNIR!!』

「変身」

## 『TYPE TRON』

全身がオレンジと黒で構成された装甲で包まれる。変身の余波で空気が舞い、土煙が

吹き飛ばされる。同時に視界が晴れ、同じく聖遺物をまとった二人の奏者が見えた

まずは変身と同時に後ろ回し蹴りを真後ろに叩き込み、大穴を開ける、これで避難経路をひとつ確保、落ちたら怪我するかもだけど死ぬより良いよね。

次にノイズに教われそうな人を救う、小さな子供や死にたくないと叫んでいた少女の周りのノイズを倒し

出入口に向かうノイズを数体倒した。流石にすべては救えないが元の人数よりは救えたと思う、小さい子に「ひーろーさんありがとう」と言われたときはちょっと嬉しかった。うん、早く逃げようね。

それにしても僕が登場したことでもし指令室が正常だつたら「新たな聖遺物反応を確認！これは！」「『ギャングニールだとお!!』とかが行われていたかもしれない、今いろいろ起こってるからそんな余裕はないだろうけど

「お前は何者だ」

そんなしょーもない事をしながらノイズと戦っていたら隣に天羽奏がいた。殺気をこちらに向け、槍を構えている。

なんと話しかければいいのか分からず黙ってしまう  
「だんまりかよ、何が目的だ」

何て返せば… そうだ、こういうちよつと敵ライダーみたいなキャラはそれっぽい言い回しで意味深なことを言えば強キャラ感が出るって言われてた気がする。  
えつと…

「… 自らの命までを燃やして戦いを選ぶか、ガングニール」

「… あんた、何を知っている?」

殺気が更に鋭くなる、一步でも動けば彼女との戦闘が始まりそうだ。  
だがその瞬間、天羽奏のアームドギアが異音を上げる  
「くそつ、时限式はここまでかよ…」

「きやああああつ！」

「つ！ まづい！」

さてどうするかと頭を悩ましていると悲鳴が聞こえた、立花響だ。

足場が崩れ地面に放り出され、ノイズがそちらに向かう。すると天羽奏は僕のことを忘れたようにそちらに向かった。

敵の猛攻を防ぎ、ガングニールが碎け、その破片が立花響に突き刺さる  
天羽奏は武器を放り捨てて立花響の元へと向かった。

「おい！ 頼む！ 目を開けてくれ！ … 生きるのを諦めるな！」

「… からではよく見えないが原作のようなやり取りがあつたのかもしれない、いくつ

か言葉を呟くと彼女は再度武器を取り、ノイズ達の前に躍り出た

「ここだ、ここで止めなければいけない

もはや僕のことを忘れた天羽奏は絶唱を使おうとし、歌を歌おうとした

「G a t r a d i s   b a b e l   z i g g u r a t   e d e n a l   E m u s t o l  
r o z e n   f i n e   e l   b a r a l   z i z z l i l l i」

「まさか…奏！駄目ッ！」

風鳴翼も気づいたのかこちらに駆け寄ってくる、だがそれでは間に合わない、だから

近くにいた僕はガンギニールを掴み、強い力で引っ張り絶唱を中断させる

「一なッ!?何をするんだ！あの大量にいるノイズを消し去るにはこれしかないんだッ！  
だから、邪魔をする…ぐつ！」

絶唱を無理やり中断されたせいか顔を苦痛にゆがめている

疑問だつたんだよね。『生きるのを諦めるな』って言つていたのに自分は諦めてたこ  
とに

自己犠牲精神が高かつたのか、自分の命より守りたいものがあつたのか何だつたのか

…少し強い言い方で否定する

「…生きるのを諦めるなど言つた本人が生きることを諦めるのか、安い言葉だな」

「一なッ!!お前に…！お前に何が分かるッ!!」

「…わからないさ、何も。お前と同じようにな」

「何…？」

その瞬間

ドスツという音が天羽奏の腹部から聞こえる

「…え？あ…ゴフツ」

「あ…ああ…奏ツ!!!」

僕が天羽奏の腹部に手刀を突き刺したからだ。第二関節ほどまで手は刺さり、天羽奏は吐血する

これが三つ目の目的、風鳴翼に敵愾心を抱かせる。それに何もなくて天羽奏を攻撃したわけではない

このギャングニールの力に『調律』という能力がある、本来はノイズに攻撃するために使われるもの、だけども僕のこれには相手の体を多少いじることが出来る、怪我を少し塞いだり不純物を取り除いたり。いじるというよりも『健康に戻す』が近いかもそれない

これで僕は天羽奏の身体からLINKERを取り出した、血とともに緑色の液体が出る。彼女は地面に膝をつく、それと同時にギャングニールの変身が解けたので聖遺物のネックレスを引きちぎる。見た目は派手だけど『調律』のお陰でそこまで深い傷ではない

い。まあ、しばらく歌姫は休業することになるだろうけど

「な…か、返せ…」

「貴様には不要なものだ」

「貴様あつ!!!」

それと同時に風鳴翼が剣を持って飛び込んできたがその刃を片手で受け止める  
「なつ、何!？」

正直かなり痛いが強者アピールをするために片手で受け止めた、そのまま風鳴翼を近くの壁に叩きつける

風鳴翼は壁に叩きつけられ肺の中の空気を一気に吐き出した、シンフォギアに置いて重要なのは歌。つまり喉や肺にダメージを負うとかなり弱体化するだろう

「がつ…つ、強い…」

「…時間だな」

あまり長居するわけにもいかないのでそろそろノイズを殲滅して帰宅しようと思う、手も痛いし

思つたよりも目的を達成できたので早く終わらせて二人の治療をさせないと。

僕が右手を虚空に向けると手元に槍のような剣のような銃のような武器が現れる。

これはアラインの武器、ガングンニル

ランスマード、ソードモード、ガンモードの三つのフォームが使える多様性のある武器だ。ベルトからガジェットを取り出しランスマードのギャングニルに差し込み、柄をスライドさせガジェットを装填した。

『GUNGNIR!! CRITICAL FINISH!!』

「…ハアッ!!!」

ギャングニルを大きく振るうと辺りにオレンジ色の斬撃が飛び、ノイズが全て殲滅され、塵となりがそこら中に炭素の塊が落ちる

「ギャングニール… だと、お前は…お前はいつたい…」

僅かに意識が残っている天羽奏がそう呟く

僕は彼女に背を向け、呟くように伝えた

「俺の名はアライン、仮面ライダーアラインだ」

「仮面ライダー…アライン」

僕はそういうと近くに呼んだバイクに股がりその場から去つた。

これが『仮面ライダーアライン』が初めて二課の記録に登録された日である

「必ず… 取り戻す」

あの後、二課からやつてきた救援部隊によつて立花響が救急車で病院に運ばれて行くのを見送つた

天羽奏も立花響を見送つた後、氣を失い。病院に搬送された。  
命には別条はないがしばらく安静にしないと危険らしい

風鳴翼は何も発さなかつたが見ただけでわかる、激しい怒りを内包していることが  
心の中が復讐で満たされている、風鳴弦十郎はその顔を見て思い出した。二課に来た頃の奏を

「了子君…」

「ええ、反応はガングニール。間違いなく聖遺物ね。いつたい何なのかしら…」

騒動の後の二課

先ほどの戦闘の映像をみながら司令、風鳴弦十郎と櫻井了子はアラインについて話して  
いた。

残念ながら現れた付近のカメラは壊れていて見ることは出来なかつたが  
「アラインと名乗つていたか」

「アライン、ドイツの音楽用語で『一人で』って意味よ」

「ふむ、しかしギャングニールを取られたのは痛いな。何と説明すればいいのか」

「風鳴弦十郎は頭を抱える、これからのことには頭を悩ませていてるのだろう

「でも正直よかつたかもね、奏ちゃんの体かなりボロボロだつたし、それに…」

「ああ、体からLinkerが消えていたんだつたか」

「ええ、ボロボロだつた体もだいぶ回復していたわ、それも謎ね」

「二人はそう話すと再度アラインについて調べたが特にめぼしい情報は見つからなかつた。

「これであと二年後には原作開始か、それまでに原作キャラと知り合いになれるとなればいいんだけど」

# あたたかい人

原作差異

・響の父親の会社の取引先の社長令嬢の生存により、父親が行方知らずになつていな  
い

・被害者総数 12874人→8246人

・最初は正義のように大々的に生存者狩りが行われていたがツヴァイウイングの天羽  
奏の訴えにより鳴りを潜め陰湿ないじめのようになつていてる。

・助けてくれたヒーロー『仮面ライダー』の噂がある

「へいき、へつちやら」

自分に言い聞かせるように彼女は呟いた。

雨の降る人通りの少ない午後の土手。彼女——立花響——は雨に打たれながらフードを  
深く被り、同じ言葉を呟いていた。彼女の服には多少傷がついており、顔にも擦り傷が  
見える。

生存者狩りと呼ばれるライブからノイズに襲われながらも生還したもの達を狙う暴

行行為である。被害者の死因の半分以上が逃走中の将棋倒しによる圧死や避難路の確保を争った末の暴行による傷害致死であることが週刊紙で掲載され、過剰に煽るような文面により被害者遺族や野次馬の一部が行い始めたいわば魔女狩りだ。

立花響もその被害に遭っている一人であり、家に石を投げられたり罵声や暴力を振るわれていた。

彼女の心はもう限界だつた、憔悴しきつており今までの疲れもあつたのかぱたりとその場に倒れた

響 side

なんだろう…あつたかい…

目を覚ますと知らない天井が見えた。

辺りを見渡すとどこかの部屋、敷かれていた布団で寝かされていたようでそばにはタオルが置かれている。生活感のある部屋のようで所々に日用品が見かけられた。  
「あ、起きたかい？」

体を起こすとキツチンらしきところから一人の女性がいた。

腰まである長い黒髪を首後ろで簡単にまとめ、スレンダーな体に少し低いけど鈴がなるような透き通つた声、とても整つた顔立ちをしているとても綺麗な人だつた。思わず

顔を赤らめてしまふほどに

「体は大丈夫かな？ 雨に打たれてたからシャワーでも浴びたらどうだい？」

「あ… はい…」

促されるままお風呂場でシャワーを浴びる、お湯が冷めた体をあたためてくれた。

お風呂から出るとフリーサイズのシャツとジーパンが置いてあつたのでそれを着る。着心地的に買つたばかりみたいだ。

「… あの」

「あ、体は温まつた？ これも飲む？」

ふかふかのソファーに座らせられるとホットミルクを出してくれた。砂糖とハチミツが入つていて美味しい

優しくしてくれたからなのか、ぽろぽろと涙が出てきた。するとすぐにタオルを渡してくれた

「な、何も… 何も、聞かないん、です… かつ」

「話してくれるんなら聞くし、話したくないなら聞かないよ。それよりも『めんね、勝手に連れて来ちゃつて』

そういうとお姉さんはにつこりと微笑んでくれた。すると心がまた温かくなつて涙が出てきた。

私はぼろぼろと言葉をこぼした、ライブに行つたこと、ノイズの被害にあつて生き残つたこと、迫害されるようになつたこと。これを話したら目の前のお姉さんも同じようになるかも知れなかつたのに

話をすべて聞き終わるとお姉さんは頭を撫でてくれた、そして優しい声で「頑張つたね」と言つてくれた。

お姉さんの名前は黒野飛鳥と言うみたい私が「飛鳥さんって呼んでもいいですか?」と聞くと笑顔で「いいよ」と言つてくれた。

飛鳥さんは辛くなつたらいつでもここに来ていいよ、と言つてくれた。友達をもつと頼つた方がいいとも言つてくれた。未来に、話してみようかな

「疲れたときは甘いものを食べるといいよ、手作りだから少し不格好だけどね」

飛鳥さんはそういつてショーケースを出してくれた、手作りと言つていたけど普通にお店で出してもいいくらい美味しかつた。夜も遅くなつてきたからと飛鳥さんはバイクに乗せて家の近くまで送つてくれた、本当に至れり尽くせりだ。

「またね、響ちゃん」

「はい、飛鳥さん」

とてもとても優しい、あたたかい人

今度は、お土産でも持つていこうかな

# 奏でる羽と風鳴る翼

「うーん…」

鏡の前で体つきを見てみる。

「うーん…」

女性かと見間違うかのような細い腕、くびれてるとは言わないまでも細い腰  
というかもう完全に女性の顔

「やっぱりもう少し筋肉付けたいなあ…」

改めまして、黒野飛鳥です。日々筋トレを精一杯頑張つておりますが相も変わらず筋  
肉は尽きません

男なのにね、銭湯とか行くと必ず女湯の鍵渡されるんだよね。もう19だよ、原作開  
始したら20歳なんだけど…女顔だと結構つらい。

初見で男性だと思つてもらつたのはほほない、喉ぼとけも触つてあるかな…?つてレ  
ベルだし。声もちよつと低い女性で通用するレベル

髪短くしたら男っぽくなるかなとか思つてみたけど美容院の人 「髪は長い方がいい  
ですよ!!お客様の顔立ちだと逆に短いのは似合わないと思います!」 と言わされて長いま

ま。そのままざるざると伸びし続けて気が付けばこの長さ

この世界は髪の色も多種多様なだけあって髪型にもそこまで厳しくはなかつた。高校も長髪だつたけどなにも言われなかつたし

そんなことを思いながら僕は上着を羽織り出かける準備をする、今日はバイト  
ちよつと手伝つてほしいぐらいだつたから昼頃には終わるみたいだし、そのあとは  
ラーメンでも食べに行こうかな。

少し気になる店を見つけたし、半日も出ないのに一日分の給料もらえるつてラツキー  
だね

ここはとある書店、元々こここの元店長だつた叔父さんの娘さんが一人でやつていたら  
しいが本が増えると一人では管理しきれなくなり。バイトを探していたらしい。現店  
長である娘さんはとても美人なのでバイトの応募も多かつたらしいけど店長さんが男  
性が苦手らしく、直接に来た中で力仕事が出来そうであまり抵抗感のなかつた僕が選ば  
れたらしい。あれ、女顔役に立つてる…?

ちなみに履歴書の性別の欄を見た店長に六度見ぐらいされた

「鷺沢さん、本はここで大丈夫ですか？」

「…あ、はい。大丈夫ですよ」

手元の本の夢中になつていたからか少し間を開けて返事をする

目元が少し隠れたとても綺麗な女性、こここの店長の鷺沢さんだ。本を読むのが好きで食事を忘れて一日中本を読んでいたこともあるらしい。見た目だけならアイドルもいけそうなぐらいの顔とスタイルだが恥ずかしがり屋なのでなることはないだろう

「本日はお休みでしたのにありがとうございます」

「いえ、ちょうど暇でしたしこのくらいなら大丈夫ですよ」

「そういうていただけます、本日はもう…」

大量入荷された本の整理が終わり、店長がしめの挨拶をしようとしたときレジの方から声が聞こえた

「すみません」

「あ、はーい」

「私が行きますよ」

「いえ、いいですよ。本の続きも気になるでしようし」

「では…お言葉に甘えさせていただきます」

鷺沢さんが座つてまた本を読み始めるのと同時に僕はレジへと向かつた  
レジへと向かうと新しく入った歴史系の小説を持った青髪の女性が一人

「おや、黒野さんではないか。今日は休みのはずでは…？」

「こんにちは風鳴さん、今日はちょっと荷物が多くつたので臨時で入つたんですよ。こ

の後はすぐに帰宅です」

そう、ツヴァイウイングのSAKIMORI。風鳴翼である。初めて見たときは本当にびっくりした、店長に聞いたら結構前から来てくれているらしい。

一年前に思いつきりケンカを売つてしまつていたのでドキドキしていたがアイドルに会えた驚きと思つたらしく特に変に思われることはなかつた。

「420円です」

「うむ、ちょうどだな」

ここである程度仲良くなれるのは本当に良かつた。

原作で関わることがあるといちいち誰…となるのを防げるのはいい、あと単純に原作キャラに関わるのが嬉しい。

新しく入つた商品の話をしながら軽い雑談をすると天羽奏も怪我はすつかり治つたらしく普通に出歩けるぐらいにはなつたらしい。よかつた、あの攻撃は流石にドキドキしてたし後遺症残つたらどうしようつてずっと不安だつたしね。

流石にシンフォギア関係は話せないようだが特に問題はないみたいでよかつた

「ではまた来るよ」

「ありがとうございました」

さて、これで終わりだしラーメンでも食べに行こうかな

「いつただつきまーす」

「…いただきます」

：どうしてこうなつた

視線を横に向けると僕が一年前に致命傷を与えた相手、天羽奏がいた。  
時間は少し前に戻る

「あの・・・そろそろ離してほしいのですけど・・・」

「いいじやないですか！少しぐらいお茶しましようよ！・」

「そーそー！昼飯もおこりますから！」

現在、僕はナンパに会っていた。男の

メンズ着てるのに、Tシャツジーパンだけど。

ラーメン屋に行こうと思つたけどチャラそうなるよくある二人組の男に声をかけられ  
た。

君らが声をかけてるのは男なんだけどなあ：非常に女顔だけど、初見で男つて思われたことないけど

と言われてもついていく気もなく、断つているんだから諦めてほしいんだけど…

「あの、そろそろ本当に」

「おー、ここにいたかー！探したぜー！」

「あ？ おい！」

最悪暴力的な手段に訴えなきやないけないなあとか思つていると

僕の腕を取つて強引に連れ出してくれた人がいた、声的に男性か女性か分からなかつたけど

女性特有の圧倒的な胸部のふくらみで女性ということが分かつた。

というか変装してるけどこの人…

「いやー、よかつたよかつた。というか困つてているなら大きな声を出すとかした方がいいぞ」

「す、すいません…えつと…もしかして…天羽奏さん…？」

「えつ、あつ…完璧な変装だつたのに（ボソツ）…よくわかつたな！」

サングラスと帽子かぶつてるだけじやん、せめて髪型をえるとかあるじやん

「あ、えつと…黒野飛鳥といいます。先ほどはありがとうございました」

女性に守られるとはうーん、男として情けない。でも格闘技使つたら変に後遺症とか残りそうで怖くてなあ

名前を名乗ると天羽奏は少しだけ考え込む、すると何かを思い出したかのように手をポンつと叩いた

「もしかして、鷺沢書店で働いてるか？前に翼から聞いてな」「あ、はい。いつもありがとうございます」

ああ、そうそう。こんな感じだつた。

それで話していると昼食はまだ何を食べに行くとラーメンをと答えていつたらあれよあれよという間に連れてこられた。

なんで過去に病院送りにした相手と食事をしないといけないのかな…まあ相手は知らなわけです

というかアイドルと食事するとか結構すごい体験じやないだろうか  
ラーメンとか色気も何もないだろうけど

「そういえばさ、黒野は何か格闘技とかやつてるのか？」

「…えつ!?ど、どうしてですか？」

「あ、いや、体の運びとか一瞬構えてたから何かの格闘技でもやつていたのかなって」まさか一瞬無意識に構えをしたのが見られていたとは…うーん、嘘をついたら怪しまれそうだしまあ無難な

「少しだけ体を鍛えているんです、最近物騒ですから」

「…そ…う…か」

その間に何があつたのかは分からぬが、少し悲しそうな顔をしていた。

食後に軽い雑談をし、別れる。ちゃんと会話をしたのは初めてだが 最近物騒といったがノイズの出現率が最近とても増えているのだ。

お陰で変身する機会も増えた、だいぶ体に馴染んできた気がする。まあとりあえず今日は帰つて：

『ノイズが現れました！市民の皆さんにお近くのシェルターに…！』

同時に響く、サイレン。ノイズだ

近くにいた人たちは大慌てで近くのシェルターへと走り出した

最近はある程度ノイズが現れる方向が分かつてきただのでその方向を向く

「…まずい」

先ほど天羽奏が向かつた方向だ

彼女は今聖遺物を持っていない、僕が取つたからだけど…

とはいえ彼女に死なれるわけにはいかない…そろそろ返すべきかな…ガングニールの聖遺物

とりあえずドライバーを腰に巻き、ガジェットのボタンを押す

『BEYONHERLD GUNGNIR!!』

ガチャン、キュイーン

「変身ッ！」

ガシュンッ

『： TYPE TRON』

軽快なBGMが流れて体中に装甲が展開され、遠くから変身したと同時に変化したのかバイクが来た

僕はそのバイクにまたがり、ノイズの方向へと走り出した

# 絶唱、OVERLOAD

天羽奏の元へ到着すると同時にガンモードにしてあつたガングンニルを放つ、光線とも言えるような弾丸が飛びノイズ数体を炭素の塊へと変える。

ノイズに囲まれていた人達はその穴から脱出し、僕にお礼を述べてシェルターがある方へと走つて行つた。

「……いなか」

逃げた人の中に天羽奏は見当たらなかつた。

近くには炭素の塊も見えないため死んではいないと思うんだけども…

そう呟きながら視界内にいるノイズをガングンニルのモードを変更しながら廻ぎ払う、この時期のノイズは確かシンフォギア奏者の疲弊を狙つていてんだつたか…

うーん、ダメだ。年表とかは覚えているのに細かい設定とかは覚えてないなあ。そもそもこの記憶が本当かも分からぬし天羽奏が生存している時点すでに本来の道筋とは違うか

「……!!!」

「今のは……子供の泣き声ツ」

そう言つた瞬間に声のした方向へと走る

ノイズがこの声を聞いたのならすぐさまにそちらへと向かうだろうからね  
急いでいるときアラインの姿は便利だ、車よりも早いスピードで走ることが出来るから

まあ体力はそこそこ使うから長距離の移動はバイクの方がいいけど  
泣き声がするところを見ると天羽奏が泣いている子供を背負いながら逃げていた。  
多少疲れは見えるがシンフォギア奏者で鍛えているのかまだまだ走れそうだ。

とりあえずそれ違うように現れ後ろのノイズを倒す。

天羽奏は驚いたようにこちらに振り向くと憎悪のこもつた声で僕に対して声をあげる。

「てめえは……！」

「……一年ぶりだな、天羽奏。息災か？」

「ああお陰さまでなあ……！」

向き合いながら僕は背中にいるノイズを倒す。

完全に嫌味を言つている敵キヤラだ、というかどうしようこれ。逃げるにしてもまだノイズ残つてゐみたいだし

「I myuteus amenohabakiri tron……」

「…」の声は

「翼つ！」

すると目の間に大きな壁が上から落ちて地面に突き刺さる、まるで  
「壁か？」

「剣だ！」

それと同時に上から剣を持った風鳴翼がこちらに向かつてきた、ガングンニルを急いでランスマードに変形させて剣を受け止める。

一年前に受けたものよりかなり重い、正直今では素手で受け止めることはできないだろう

「…風鳴翼か、強くなつたな」

「お陰様でな!!」

そのようなことを言いながらランスマードと剣をぶつけ合つた

奏 side

くそつ！強い！強すぎる！

翼もかなり強くなつたのにまるで効いている様子がない、アラインは片手の槍のような武器で翼の攻撃を難なくはじいている。

くそつ、ギャングニールがあれば…！

「翼！奏君！」

その瞬間、上からおっさんが落ちてきた

「はあつ！？」

ちょっと待て!?どこから落ちてきた!?

正直もうあんまり驚くことはなくなつたけど、この辺は大きな建物もない開けた場所で…

と、上を見上げるとヘリコプターが一機上にいた。見つけると緒川さんも上から降りてきた。

どうやらアライン登場とノイズがいなくなつたのを見て、こつちに駆けつけてきたらしい

「緒川さん」

「お待たせしました、その子はこちらで預かります。奏さんもこちらへ」

「いや、少し待つてくれ」

ヘリへと誘導する、緒川さんに背負つていた子供を渡しておっさんの方を再度見る

おっさんはアラインの前に立ち、構える。

「お前が仮面ライダーアラインか、中々男心をくすぐる見た目をしているな」

「…名を聞こう」

「特異災害対策機動部二課司令、風鳴弦十郎だ！」

その瞬間、おっさんがアラインの眼前にまで迫った

「なつ！」

「ふんつ！」

「ぐあつ!!!」

アラインが反応するまでもなくおっさんのこぶしに殴り飛ばされ、近くにあつた壁へとめり込ませた

アラインも流石に堪えたの片膝をつく

「生身で…これか…やはり、このままでは勝てそうにない」

立ち上がつたアラインはベルトについている機械に手を当てて、何かのレバーらしきものを上にあげた。

するとベルトを中心に装甲やベルトがまるで変形するかのようにスライドする。

ガシャッ

『Danger! Danger! Danger!』

「…絶唱」

『OVERLOAD!… TYPE ZIZZL』

絶唱とつぶやきレバーを再度下に押し込むと装甲の一部が外側に向かうように変形し、アラインの姿が変わった。体にはまるで電気でも流れているかのようにバチバチと放電し、装甲のあつた一部は基盤のようなものが見えていた。だけども見ただけでわかる、さつきよりも何倍も強くなつたということが。もし私と翼がシンフォギアを使つて戦つたとしても片手でいなされるだろう。

アラインはゆつくりと構える。

「…いくぞ、風鳴弦十郎」

「ふつ、来いッ！」

そして二人が同時に姿が消えた。

正確には消えたわけではなく高速で動いているだけのようだけど…

…本当におつさん人間なのか疑問だなおい

激しくこぶしを打ち合う音が聞こえるがやアラインが押されているようだ。

嘘だろ…、あれよりもまだまだ強いのかよおつさん…

「くつ、絶唱を使つてもまだ届かないか…！」

「おとなしく投降することだ。悪いようにはしない」

「悪いが断らせていただく、こちらにも目的があるので…ねつ！」

言葉を交わし終わると再度二人はこぶしを打ち合う…ん？何かアラインの方から何

か音が聞こえる。

『1 0 : 9 : : : 8 : : : 7 : : :』

「…カウントダウン…か？」

『3 : : 2 : : 1 : : TIME UP』

『REFOMATION』

「しまつ…ぐあつ！」

それと同時にアラインの装甲が元に戻った。どうやらあのフォームには時間制限があるらしい

装甲が戻った瞬間スピードも戻ったようでおつさんのこぶしが腹部にめり込む  
その瞬間ポロリとアラインの懷から何かが落ちた：あれは！

「おっさん！」

「おうよつ！」

おつさんがそれを掴みこちらに放り投げてくれた。やつぱりこれは…！

「ギャングニール!!」

過去にアラインに取られたギャングニールの聖遺物だ。

アラインは取られたことで不利と感じたのかすぐに逃走体制に入った

「戦闘を長引かせ過ぎたか…」

「つ！待て！」

おっさん気が追いかけようとするが銃撃により阻害され、逃げられたようだ  
でも…ようやくこれで…私も戦える

### 飛鳥 side

つ、疲れた…というか痛い、殴られたお腹が痛い。そして絶唱モードになつたせいか  
全身が筋肉痛みたいに痛い

絶唱モードはいわば555のアクセルモードだ、すべてのスペックが向上するが時間  
制限あり、肉体疲労あり

シンフォギアの絶唱のように血を吐いたりしないのはいいけど、これ鍛えてなければ  
筋肉がいくらか断裂してたかも…

とりあえずガングニールの聖遺物を渡せたのはよかつた、原作開始まで半年を切つた  
みたいだし

少しでも戦つて戦闘の感を取り戻してほしいな…でも、司令が来るのは聞いてないよ  
アラインの装甲のお陰で痣とか骨折はしていないけどすごく痛い…めちゃくちや痛い

⋮

絶唱モードでも負けるつてどれだけ強いのよ本当に⋮

「とりあえず…甘いものが食べたい」

今日はクッキーにしよう

## 前日、主人公の決意

「ここにちはーー今日も遊びに：あ、飛鳥さん!?どうしたんですかその傷!」

「あ、響ちゃん。えっと…昨日模様替えをしようとしたら荷物が落ちてきちゃつて…」

天羽奏にガングニールの聖遺物返してからノイズの出現率がさらに上がり、倒しに行くとツヴァイウイングの二人に凄い絡まれるのである。

昨日もノイズを倒していくら乱入してきて戦闘開始である、正直2日に1回のペースで来るのでもはや体が持たない。ノイズ狩つてその後に奏者一人との闘いである、司令が来ないだけまだマシだけど…

装甲で耐え切れずに怪我まで負つてしまつた、仮面ライダーシリーズで変身解除されたら怪我を負つてているつていうのを見ててなんで装甲あるのに怪我してるんだろ、つて思つてたけど。

装甲がある程度の余剰体力みたいになつてそれ以下になると体にも傷を負うみたい、回復しきつてない状態で戦つてるので体力が戻らなくて怪我を負つてしまつた。

それを家に遊びに来た響ちゃんに見られてしまつたのだ

「本当ですか?!一人でするの危ないから次は他にも人を呼んだ方がいいですよ!」

どうやら誤魔化してくれたようだ。

そういえば今日は何のようだろ、一応パウンドケーキは用意してあるけど

「あしゅかしやん！わたしやがおかしをたべにきてりゅだけだとおもつちやいけましょんよ！」

うん、そうだね。口一杯に詰め込んだパウンドケーキを飲み込んでからそのセリフは言おうか

響ちゃんの用事は僕に明日から通う予定の私立リディアン音楽院の制服をお披露目しに来たらしい。

あれ、僕つて親戚のお兄さん？まあ可愛いしいいか

「どうですか飛鳥さん！」

「うん、とてもかわいいね。明日からだつけ？」

「はいっ！明日から高校生です！」

「おめでとう、確かお友達の小日向ちゃんもり、ディアンに通うんだつけ？」

友人の小日向未来のこともすでに話は聞いている。

僕と初めて会った後小日向未来とは話し合つたようだ、原作同様のいい関係を気づけているみたい

パウンドケーキを三切れ頬張った響ちゃんはいつものようになんでもない世間話を

する。

人助けをしたという話や僕のバイトのお話という何でもない話だ。

「響ちゃん」

「はい？ なんですか？」

「響ちゃんはこれからも人助けをするのかな、時々怪我もしてるし…もつとひどい目に合うかもしれないのに」

僕は少し真面目な顔をしていった

これは大事な質問だ、今後のシナリオに関係することだけではなく。僕自身の行動にも関係がある

響ちゃんは僕の態度に真面目な顔をし、凛とした顔つきで答える  
「はい、困った人がいたら放つておけませんし。それが私ですから」

「…そつか」

どうやら響ちゃんは原作と変わらずまっすぐとした性格のようだ  
これで僕も何の差し障りも無く

：君たちの敵に回ることが出来るよ

■■、 ■・ ■■■と ■■■■■

「…おつ、 ■■■■じゃねーか」

「…… ■・ ■■■か」

「）は ■■■の ■■■■■。 ■・ ■■■は偶然にも会った ■■■■■に声をかける

■■■■は露骨にいやそうな顔をしており、嫌悪感を隠そともしない

「俺のことを嫌うは別にいいけどさ、そこまで露骨な態度取らなくともよくない？」

「……ふん」

「まーだ ■■■■■取られたことを悩んでるのか、乙女だねえ面倒だねえ全く」

■・ ■■■は頭の後ろで手を組み喰く、その言葉とか裏腹に面白そうな表情をしてい  
る。

「貴様に何がわかる」

「分かるさあ、見てきたからな」

「… ふん」

■・ ■■■は何か企んでいる ■■■■■を眺めながら思い出し笑いをするかのように笑

う

「何だその笑いは不愉快だ」

「悪い悪い、今後のことを思い出して笑つちまつたんだよ。恋心を拗らせた誰かさんの  
な」

「：貴様」

「おお怖い怖い、ではオレは退散しますよ」

■・■■■はそう笑うとその場から離れる、■■■は■・■■の背中を鋭い目つき  
で睨みつけながらつぶやく

「■・■■■、お前にはいつたい何が見えているんだ」

■■年後

「■・■■■！何をしている！」

「オレはオレのやりたいことをやつてるだけ…だつ！」

■・■■■はオレンジと黒で構成された槍を■■■に振るう、■■■はその攻撃  
を回避するとマゼンタ色の鞭を■・■■■へと向かって振るつた。■・■■■はそれを

槍で受け止める。

「つ!？」

■・■■■が槍で受け止めるとその槍にひびが入り。砕け、いくつかの欠片になつてしまい結晶化した

「あーあー、勿体ないなあー。ガングニールをこんなに粉々にしちまつて」

「…貴様、わざと破壊させたな。ガングニールを結晶化させて何を作る気だ」

「あーやつぱり気づいちやう？これが必要なんだよねえ。欠片は多く残しておかないと」

■・■■■は欠片をいくつか懷に仕舞うと黒いの銃のようなものを取り出した。

一見するとまるでおもちゃのようで銃口の下には何かを差し込むようなものが付いている。

更に■・■■■は左手を懷に入れると小さなボトルのようなものを取り出した

「なんだ…それは…その聖遺物はいつたいなんだ！」

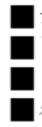
「そつか、こつちでは聖遺物扱いになるんだつたな」

「…聖遺物ではないのか？」

「まあ…いうならオレ専用の聖遺物つてことだ」

「…聖遺物を勝手に持ち出し、テロ活動を行い。貴様、本当に何が目的だ」

「いつも言つてるだろ、

 フイー

## 『B A T』

男はボトルを銃のようなものに装填し、構える

「オレは  
 カー  
 ボ 最初に戻つて繰り返すだけだ……蒸血」

## 『M I S T M A T C H』

『B A T B A T . . . F I R E!』

「そのような力を使つたところで巫女である私に勝てるどでも？」

「はつ、こつちのセリフだ。オレに勝とうなんて。二万年早いぜ！」

男、ダ・カーポはフイーネに向かつて銃を向け。引き金を引いた

# 開始、物語の始まり

「よーし、いい子だから大人しくしててねー」

バイクをメンテナンスに出したので歩きで大学へ向かう途中、木に登っている知つている顔を見つけた。

立花響である、時計を見るとそろそろ急がないと遅刻するんじやないかというレベル見ると登つて降りれなくなつた猫を助けようとしているようだ。スカートでいいのかな

「よーしよーし」

「…何してるの響ちゃん」

「うわあつ!?

「おつと」

不安定な体勢になつていた響ちゃんは僕が声をかけたせいでバランスを崩して枝から落ちてしまう。ある程度超人的な僕は問題なく彼女を受け止める。うわ、本当に軽い

「あああ、あああ、あ、あああ、飛鳥さん?!」「ごめんなさい！」

なあ

「大丈夫響ちゃん？ 女の子が木に登っちゃだめだよ。それに学校は…？」  
「え？…………ああっ!?」

響ちゃんは僕に再度頭を下げる走り去つていった。この時間なら間に合うだろう  
その時足に何かがすり寄つた。

「にやー」

「…君は人に慣れてるね」

「にー」

常日頃から餉でも貰つてているのか人懐っこく足にすり寄つてくる持ち上げても嫌悪  
する様子はない

むしろ餉くれ餉くれと言つているようだ。

「うーん、ごめんね。餉は持つてないんだ」

「ふみー」

「じゃあね」

猫を地面に下ろすと少し不満そうな声を上げるがあまりいると大学に遅れちゃうの  
で少し小走りで大学へと向かつた。

大学に到着すると妙に人だかりが出来ていて。誰か有名人でも来てるのかな  
そういうえば入学式でも何か騒ぎになつていたような…

「黒野」

すると一人の男性がこちらへと走ってきた

「おはよう鏡君、花屋さんも」

「おはよう黒野さん」

友人である鏡紅（かがみ くれない）だ

すぐ後ろにはもう一人の友人、花屋流（はなや りゆう）もいる  
エグゼイドにいそうな名前と見た目だが鏡君はどちらかというと九条貴利矢みたいに明るい性格だし

花屋さんに至つては女性である、白いメッシュが入つたロングヘアーハーが今日も綺麗である。

・・・それを前言つたら「お前の髪で言われてもな」って言われてしまつた。特に手入れしてないのにね

「今日すごい人だかりだけど何かあつたの？」

「あ、そうそう。それを伝えに来たんだよ。大ニュースだぜ大ニュース」

「大ニュース？」

「ツヅヴァイウイングの天羽奏がこの大学に入学するらしい」

「え、そうなんだ？」

原作にはなかつたけど生きていたら大学に行つてたのかな。

そもそも天羽奏学校に行つてたつけ…？

特に考えても仕方がないしまあ原作差異で考えればいいかな

「凄いよなあ、アイドルと一緒にキャンパス生活が送れるかもしれないぜ」

「…通うとしても仲良くなれるわけないだろう」

「そーだけどよー、とりあえず一目見に行こうぜ！」

鏡君は僕と花屋さんの腕を掴むと群集の方へと引っ張つていった

「えつあつちよつと！」

「…鏡痛い」

というわけで群集の中へと連れてこられた僕ら、文字通り人がごつた返しになつており正直きつい

みんなの視線の先を見てみると天羽奏がいた。近くには緒方さんもいる。

ちよつとパンダみたいな扱いされているからから少し不機嫌そう

「…綺麗な人だよねえ」

「お前の方が…綺麗だぜ」

「…きつしょ」

花屋の言葉にダウンした鏡をほおつておいて花屋は天羽を少し赤い頬で見つめてい

る

それにしてもこの世界の顔のレベルみんな高いなあ…すると天羽奏がふとこちらを見た。

一瞬驚いた後笑顔になりこちらに手を振つて駆け寄つてくる…え?

「黒野〜!お前もこの大学だつたのか〜!」

波乱が起きそうです

## 覚醒、三人目のガングニール

大学のごたごたに巻き込まれて翌日

顔と名前とTwitterアカウント晒しちゃつたなあ…まあ特に問題ないか  
今日はツヴァイウイングの新曲の発売日

そう、立花響がガングニールに覚醒する日である。

今回僕は変身せずに響ちゃんと一緒に逃げて覚醒の時とツヴァイウイングとの邂逅をしようと思っている。

アラインが出ないことを不思議に思うかもしれないが仕方ない物語に関わらないと響ちゃんが僕を避ける可能性がある、元々同じ学校に通っているわけでもないし小さい頃からの友人ってわけでもない。

それに小日向未来との不和の件もあるし、その時に懸け橋になるのでもいい

しかしこのままではアラインと黒野飛鳥を紐づけする人がいるかもしれない、誰か協力者でもいればいいんだけども：

そんなこんなで夕方、CDショップに向かいながらこれからのことを考える、今回はノイズに対する対抗策はない、つまり足だけで逃げ切る必要がある。

まあ、この数年間鍛え続けていたから逃げるだけなら楽である、何なら覚醒したばかりの響ちゃんならアラインにならなくて勝てそうである、しないけど「CDつ！…特典つ！…ってああっ！飛鳥さん！」

「…ん？あ、響ちゃん。奇遇だね！」

おつと合流した、思つたより早かつたね

「どうしたんですかこんなところで？飛鳥さんも何か買い物ですか？」

「うん、ツヴァイウイングのCDをね。今時CDって言われるけど僕としては現物の方が好きなんだ」

「おおっ！飛鳥さんもツヴァイウイングのCDを！私も買いに来たんですよ！特典がいいんですね！」

ツヴァイウイングの曲は普通に好きである、アイドル曲なのにアニソンみたいだし。それに普通に聞いて好きになつた、これからも曲は聞いていくだろう

ちなみに僕もD-1よりもCD派である、ゲームとかもDLよりパッケージ派である。現物に残る方が好きなんだよね、パソコンに取り込んでるけど

「おおつと！」のままでは特典がなくなつてしまふかもしないです！急ぎましよう飛鳥さん！」

「ふふつ、分かつたよ」

少し小走りになつている響ちゃんについていく

……さて、これから僕はこれから先の展開を知つていながらその場面に對し驚いたり慌てたりしないといけない。いうならば「こういうドツキリをしますよ」と予告されてからドツキリを仕掛けられる芸人の氣分……この例えだとまるで僕が芸人みたいだな

そうしてしばらく歩くと周りから音が消える。

僕もすべて救えない、ノイズの気配は察知していたがこの辺にいる人を救うことは出来なかつた

「え？」

といつてもこれは言い訳だろう、救おうと思えば救えるのだ

だが、『俺』は英雄でもなければ勇者でも正義の味方でもない。

無理をしてまで他人を救おうとは思わない、まあ目的のために出来るだけノイズの被害は抑えているがな

……あれ、なんか変だな。おつと、集中しないと

「ノイズ……！」

「ノイズ……!? 韶ちゃん逃げ「キヤアーー！」 韶ちゃん!」

響ちゃんが悲鳴を聞くとそつちに向かつて走つていつた

まあ原作通りの行動なんだけど僕は気になつたことが一つあつた

今の悲鳴、『二つ』あつたような…

急いで響ちゃんのところに向かうと一人の少女と小さな女の子がいた。  
誰だ…!?あの女の子は…!

年の頃は響ちゃんと同じぐらい、というか同じ制服を着ている。

まさか僕がノイズ被害者を減らしたことによる生存者…!?少し手間になるけど仕方  
がない…!

「天空寺ちゃん!」

「立花さん!?なんでここに！」

「知り合いみたいだけど今は逃げた方がいいよ！」

「つ…そうですね！立てる？」

「う……うん」

まさかの四人で逃げることになつたけど逃げるのは割と楽だつた。

子供は僕が背負い二人は走る、二人とも割と足が速かつたのでノイズから逃げること  
が出来た。

だがやはりノイズの数が多く、囮まれそうになつていて  
…仕方がない

「響ちゃん、僕が凹になる。その隙にみんなは逃げるんだ」

「えつ!?だめです！飛鳥さんに何かあつたら…」

予想通りに困惑している響ちゃんに僕はふとした笑みを浮かべる  
「大丈夫…足には自信があるから。この子をお願いね……ノイズ！こっちだ」

僕は背負っていた女の子を下ろすと大通りへと走り、ノイズを声でおびき寄せる。  
響ちゃんは僕を見て泣きそうな顔をしているが隙が出来たところに三人は入り逃げ  
て行つた

三人の姿が完全に見えなくなると僕は息を吐く、これで逃げ続けてもいいんだけど流  
石にそれはきつい

だけども変身すると二課に気づかれる、まあやりようはあるけど

僕が右手を前に出すと手の中にガングニルが現れる

最近変身しなくとも出せるようになつた、ちよつと重いけど

僕はガングニルをガンモードに変更し、ノイズを数体撃ち抜く  
さて、どのタイミングで…響ちゃんと合流するか…

飛鳥さん…！飛鳥さん…！飛鳥さん…！

幼い子の手を引き裏路地を走る私はもう泣きそだつた…

私たちの囮になつてノイズを引き付けていた飛鳥さん、ノイズから逃げ切るのは絶望的ともいわれている…

いやつ！飛鳥さんなら大丈夫！いつもみたいに笑つてくれるはず！死ぬわけなんてない！

同じクラスの天空時さんもさつきの飛鳥さんの様子を見て悲しそうな顔をしている  
急いで廃ビルの梯子を上り、息も絶え絶えにその場に倒れこむ  
やつと一息付けそうだと思ったが：周りはすでにノイズに囮まれていた。

「私たち…死んじやうの…」

「こんなのがつて…」

三人で固まるように抱き合う、絶望的状況だ

だめ…あきらめちゃダメ…！私に…私にもできることが…！

「生きるのを…生きるのを諦めないで!!!」

その瞬間、胸が熱を持つように熱くなる

そして何かの歌のようなものが浮かぶ、気が付くと私はその歌を歌つていた

「B a l w i s y a l l   N e s c e l l   g u n g n i r   t r o n :」

「立花…さん？」

その瞬間、胸の欠片が光だした

ようやくか…

僕はノイズから逃げながら近くの廃ビルの屋上から延びる光の柱を見ていた。  
この感じ、響ちゃんはちゃんとガングニールに覚醒したらしく  
さて…合流できるような位置にいかないとなあ…

「反応を絞り込みました！位置特定！」

「ノイズとは異なる高出力エネルギーを検知！」

「アラインとは異なるエネルギーです！」

「照合するわ…これって…アウフヴァツヘン波形!?」

二課の指令室、数人のオペレーターが機械を操作している

司令も新たな反応に少し強張った顔をしており、ツヴァイウイングの二人もすぐに出  
発できるようにしている

照合結果が出たのか画面に文字が表示される。

『GUNGNIR』

「三つ目のガングニールだとっ!?」

「⋮つ！奏！」

「ああっ！おっさん！出撃する！」

「ふえっ！？ナニコレ？！私どうなつちやつてるの！？」

# 遭遇、三人の奏者

「うわああああああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

「きやああああああ!!」

う  
女の子と天空時さんを抱えて響ちゃんがビルから地面に向かつて跳躍している  
よし、ちようどいい地点に行くことが出来た。着地した地点でちようど響ちゃんと会

「何か落ちてき…響ちゃん!?なんで上から…それにその恰好は…!?」

「あっ！飛鳥さん！よかつた！……つてあつ。あ、あまり見ないでください…！」

シンフォギア装着時つてぴつちりスーツに装甲を付けたみたいな感じだよね。

正直男がまとえなくてよかつた気がする、男だつたらもうちょっと変わらぬのかな

「とにかく無事で良かつたです！怪我とかないですか!?」

「うん、大丈夫。服が汚れたぐらいだよ」

逃げる時に多少転がつたりして逃げたので服はそこそこ汚れている。

生身でノイズから逃げるのは少し怖かつた、触れたら即死だしね…

ふと上を見上げるとノイズが降ってきた…まずいっ！

「危ないっ！」

「えつ?!きやつ!」

「天空時さんっ！」

僕が小さな女の子を、響ちゃんが天空時をかばい飛ぶ。なんとか全員無事で済んだノイズはぼとぼと放り投げられたかのように地面へと落ちてくる、正直不気味だ。直後大きな音が響き、振り返ると大型のノイズが建物を破壊しながらこちらへと向かっていた。

正直絶望的な状況だ、普通なら僕も天空時さんのように腰を抜かして泣いているだろう

彼女はもうあきらめたかのように目から涙を流しながら絶望した表情をし、手を組んで祈りを捧げるような体制を取った。

「もう…無理なんですか…主よ…」

「あきらめちゃダメ…あきらめちゃダメだよ…！」

その瞬間、天空時にノイズがとびかかってきた。

槍のように射出されてないだけマシだけども、このままでは彼女は炭化してしまうだろう

彼女はもう諦めているのか動く気配がない、ペタンと座り込んで祈るように手を合わ

せている

僕が腰の小型化したガングンニルに手を伸ばそうとしたとき、響ちゃんが彼女の前に躍り出る。

「響ちゃん!?」

「おりやあああああああああああああああつ！」

ノイズへとこぶしを振るう、この時の響ちゃんは思わず前に出てしまったんだろう  
シンフォギアはノイズに触れても大丈夫だというのは知らないだろうし

ノイズにこぶしを振るうとノイズが炭化し、ぼろぼろと崩れる。もちろん響ちゃんは無事だ。

「…え」

「え…私が…ノイズを…？」

その瞬間、遠くから響くバイク音。ノイズがドスドスと吹き飛ばされていく  
ノイズの山から飛び出してきたのは二台のバイク、乗っているのは…ツヴァイウイン  
グの二人だ。

赤いバイクに乗った天羽奏は僕達の目の前で停車し、風鳴翼はバイクをそのまま大型  
ノイズに突っ込ませて飛び上がった：バイクがつ！  
「あーあー、翼はまたバイクを無駄に破壊して…」

「…え？ 奏…さん？」

僕は驚いたように天羽奏に向かって言葉を告げる、ちなみに名前は大学でそう呼ぶよううに言われた。

生存者である僕たちの姿を確認すると天羽奏は僕を見て驚く  
「…つて飛鳥!? なんでここに!？」

ちなみに入つておくが彼女の方が年下である。気にはしてないけど

彼女は驚愕した顔をするがノイズに気づくと飛び上がつた風鳴翼と同時に聖歌を歌

う

「C r o i t z a l   r o n z e l l   g u n g n i r   z i z z 1」

「I m y u t e u s   a m e n o h a b a k i r i   t r o n」

二人の姿が変化する。ガンギニールとアメノハバキリの姿に

変身が終わると風鳴翼が近くに着地した：あ、アニメとは違つて変身してから着地するんですね。

「奏、そつちをお願いっ！」

風鳴翼はこちらを向くことなく剣を持ち走り出した。おそらく僕には気づいてない  
だろう

「えつ、あつ！……そこのお前！こいつらを守つてろよっ！」

「ええっ!? は、はい!!」

二人はそういうと反対方向に剣と槍を振るう

【S T A R D U S T ∞ F O T O N】

【蒼ノ一閃】

全体攻撃を放ち、ノイズを一掃する。

巨大ノイズも風鳴翼の一撃で倒され、炭化した

一瞬だ、この子達もだいぶ強くなつた。原作よりも強くなつただろう

アラインしての僕も少し昂る、風鳴翼風に言うなら「私の中の跳ね馬が躍り昂ぶるッ  
！」って感じだろうか

思わず変身したくなつてしまつた。別に戦闘狂つてわけでもないのにね

その後の対応は早かつた。軍隊のような人達とスーツを着た人達、救急車やヘリコプターもいる

小さな女の子も引き取られ、僕と響ちゃんと天空時は一か所に固まつており。今女性

から暖かいココアが渡された。

「あ、あつたかいものどうも…」

「ありがとうございます」

「どうも」

ところで響ちゃん、そのスーツ脱がないの？

「…ふはー」

と一息ついた瞬間

キュウウウウウン…

「へ？」

その瞬間ガラスが割れるような音とともに響ちゃんの格好が制服姿に戻る

隣にいた僕と天空時は軽く声を上げてしまった。

同時に響ちゃんがほおり出したカツプはなんとか掴みことが出来た。危ないし勿体

無い

後ろに倒れこもうとした響ちゃんは風鳴翼が抱き留めた

「わあああああっ！すいません！」

「いや、大丈夫か？」

「は、はい！」

その後ろから天羽奏もこちらへ寄つてくる。さつきまで戦つていたとは思わないほどの笑顔だ。

風鳴翼の対応も優しい、天羽奏が生存しているからだろうか

風鳴翼は僕達の様子を確認し、僕の顔を見るととてつもなく驚いた

「黒野さん!? あなたもここに!?」

「…え、気づいてなかつたんですか」

「気づいてなかつたのか翼」

「そこまでいようと響ちゃんは落ち着いた今なら聞けると思ったのか僕の方を向き、呟く  
「ところでなんですけど…飛鳥さん、ツヴァイウイングのお二人とお知り合い…なんで  
すか?」

聞いていいのが少し困ったような顔をしながらいう

僕はそういうえば伝えてなかつたと響ちゃんに向かつて話す

「ああ、奏さんは僕と大学が同じなんだ。そして風鳴さんは僕のバイト先によく来てく  
れる人でね。奏さんも翼さんつながりで知り合つたんだ」

「ああ、まさかこんなところで会うとは思わなかつたがな」

「ああ! それよりも助けていただいてありがとうございます! 実はこれで助けられるの  
は二回目なんです!」

「二回目」

原作ではここで風鳴翼が立ち去つていたから聞けなかつたけど、これでは話すんだ。  
内容はライブの日の助けてもらつたこと、奏の武器破損による響の怪我の謝罪など  
これは最初から仲良くできそうだなあ…と思つていると僕と天空時にタブレットの

ようなものが女性から渡される。俗にいう「このことは他言無用ですよ」っていう誓約書である。

まあ普通にサインをする…あ、指紋登録なんだこれ

「それにしても…」

「ああ、今回も来なかつたな」

ツヴァイウイングの二人がそう呟く

アラインのことだろう、まあここにいるし仕方ないよね。響ちゃんに知られるときもどうやつて知られようかな

その時、僕は携帯で時間を確認しようとして後ろのポケットから携帯を取り出す。と、同時に忍ばせていた紙をみんなの中心に落とした。

「あれ? なんだろうこれ」

僕がみんなに気づかせるように紙を拾う、オレンジと黒の二色で出来ている小さな封筒だ。僕はその紙を拾うと表や裏を確認し、書いてある文字を読み上げる。

「…アラインより?」

「「ツ!?」」

その瞬間、ツヴァイウイングの二人と緒川さんが勢いよくこちらを向く。天羽奏は勢いよくこちらに近づくと僕に少し焦った感じで話しかける。

「飛鳥つ！少し見せてもらつてもいいか!?」

「え？あ、うん」

僕は何だろうと言つた形で封筒を渡す、響ちゃん達も首を捻つっていた。

天羽奏は緊張した面持ちをしながら封筒を開けると風鳴翼と緒川さんも後ろから覗きこむ

ちなみに内容はこうだ

『今日は新たな奏者の誕生に立ち会えなくて申し訳ない、まさか新たに奏者が現れると  
は思わなかつた。』

今回は別件で用があるため残念ながらそちらにいくことは出来ないがいずれまた新  
たな奏者共々お会いしよう

Ciao!

親愛なるツヴァイウイングのお二方へ

アライン』

うん、ガツツリ挑発文です。

ちなみにCiao（チャオ）は親しい人に使う挨拶です。

天羽奏は苛立つたのか手紙を握りつぶす。

筆跡はもちろん変えてるし指紋もさつき拾つたときにはいたやつしかなく、封筒も自

作であるため特定は気にしなくてもいいだろう。

二人は視線を鋭くする、闘志を燃やしているのだろうか

「えつと…じゃあ私もそろそろ…」

響ちゃんも夜が遅いのかそろそろ帰ろうとしたとき

ずらつと黒服たちがツヴァイウイングの二人を中心に並び立つ、凄い光景だ。

「悪いけど、このまま返すわけにはいかなくなつた」

「…悪いわね」

「ええつ!? 何ですか!?」

その様子を見ていると天空時がぽつりと呟く

「もしかして…さつきノイズを倒した…」

「十中八九というかそれだろう、このままだと僕たちはどうなるんだろう。このまま開放かな：」

響ちゃんの手に手錠のようなものを取り付けられる。これは多少行動起こしておこうか

「響ちゃん!？」

僕が響ちゃんの方向に向かおうとすると肩を誰かにつかまれる。

振り返ると緒川さんがいた、ちなみに緒川さんとは大学でいいさつはすませている

「緒川さん…」

「大丈夫です、悪いようにはしません。よければお二人もついてこられますか？許可は頂いてます」

どうやらついていつてもいいらしい、僕は天空時に視線を向ける。

天空時は首を小さく縦に振った、彼女も行く気らしい。というかまだ彼女と自己紹介すらしていない

「こちらへどうぞ」

「…あの…黒野飛鳥さん：でよかつたですか？」  
緒川さんは響ちゃんとは違う車に誘導される。僕と天空時はその車に乗り込み。響ちゃんが乗った車を追うように走り出した。

「…あの…黒野飛鳥さん：でよかつたですか？」

車に揺られている途中、天空時が僕に話しかけてきた。

どうやら自己紹介をしたいらしい、僕も気になっていた。ゴーストっぽい苗字だし

「あ、黒野飛鳥です。響ちゃんとは知り合いで大学二年生、二十歳です」

「天空時（てんくうじ）恋香（かおる）です、立花さんとは同じクラスで時々会話をしています」

どうやら響ちゃんとはそこまで仲が良い、というわけでもなさそうだ。

クラスメイトどまりだろうか、まあこの秘密を知つてもう少し仲良くなつてくれると嬉しいけど

それとちょっと気になるのが胸元にかかっている十字架、そして先ほどの祈りを捧げるようなポーズ

もしかして…

「もしかしてだけ空時さんって…シスターさん？」

「あつ…はい、母の家が教会でして…シスターと呼べるものではありませんが…」

会話をしているとどうやら母親が教会の人で父親がとある企業の社長、いわゆる社長令嬢らしい

…もしかして一話で死亡しているはずの響ちゃんのお父さんの取引先の社長の娘

さんなのだろうか？

僕がいたから生存者も増えて彼女も生き残つたのだろうか：そういうえば響ちゃん、家にまだお父さんがいるみたいな会話をしていたな：（お父さんがまた家で〇〇みたいな）

生き残つた同士で話があつたりでもしたのだろうか、つまり父親は行方不明になつていないということ…うーむ…鍊金術師のところで少し面倒なことになりそうである…着いたのは私立リディアン音楽院、降りると天空時と響ちゃんはえつ…と言つた顔を

する。

僕も怪しまれないよう驚いた顔をしていた。

「ここつて…響ちゃん達の学校…だよね？」

さて…次は二課との対面か…一期のラスボスとの対面と人類最強との再開だ…

…ぼろが出そうで怖いなあ…

## 紹介、特異災害対策機動部

女子高生二名が悲鳴を上げるフリーフォールよりも恐ろしいエレベーターに乗り、深い地下へと降りてゆく

凄いなあ…まるでステンドグラスのような壁が見える、綺麗だけど少し不気味だなあすると天羽奏が真面目な顔をし、僕たち三人の方を見る

「…」から先は気を付けろよ、政府の機密に当たる部分だ。下手をすると…消されると

あまりにも冷たく鋭い声に響ちやんと天空時は体をこわばらせる。

…だけでも僕には見える、風鳴翼が呆れ顔をしており緒川さんが苦笑していることにそしてエレベーターの扉が開かれる。

すると

パンツ！パンツ！

軽い破裂音、思わず僕たちは身構えるが…

「ようこそ！人類最後の砦！・特異災害対策機動部二課へ！」

ようこそ二課と書かれた看板や飾りつけされた部屋、どうみても歓迎ムードである。

隣を見ると天羽奏はしてやつたりとした顔をして笑つており、風鳴翼と緒川さんは苦笑している。

その後ひと悶着あり、響ちゃんの手錠が外れたり鞄を返されたりもしたが割愛しておこう

「では改めて自己紹介をしよう。俺は風鳴弦十郎、ここ」の責任者だ」

「私は出来る女と評判と櫻井了子、よろしくね」

響ちゃんは櫻井了子に連れていかれたが僕達はその場に残る。

その後簡単な説明を受け、夕飯の代わりに並んでいる料理を食べる  
すると料理を食べている天羽奏と風鳴翼に話しかけられた。

「ずいりゆんれいしえいだな（随分冷静だな）」

「奏さん、行儀が悪いよ」

天羽奏は口の中に突っ込んでいたエビフライを飲み込むと話をつづけた

「いや、やけに冷静だなって思つてな。こんなところに来たらもつと慌てるものだと  
思つてた」

「混乱はしているよ、でもなんだかいろいろ超えすぎてわからなくなっちゃつた」

「僕は料理を置くと二人に向き直る

「聖遺物、シンフォギア。色々あり過ぎて一周周つて冷静になつちやつたよ」

「まあ今日だけで色々あつただろうからな」

「そういえば…聖遺物だつて？それってどういうのなの？特に一人とも何も持つてなかつたし」

僕がとぼけてそういうと風鳴翼は胸元からペンダントを取り出した、赤い宝石のようなペンダントだ

「これが…」

「そうです、これが私の聖遺物。アメノハバキリです」

「触つても？」

「ええ、壊さないように気を付けてもらいたいです」

受け取つてみると想像より硬く爪で軽く削つても特に削れたりもしない

「ここでちよつとやりたかつたことを試してみる…………出来た

完成したそれをポケットに忍ばせて風鳴翼にペンダントを返そようとすると

…………

「ん？ 何か聞こえた…？」

「ありがとう、これがあんな姿になるなんて凄いね：いや本当に凄い姿だつたけど

「あ、あれは忘れてくれ！」

誰が設定したか分からなかつたけど、凄いよね。ぴつちりスーツだもん

「そういえばそれを持った時。何か聞こえなかつたか」

「何か…そういえば何か聞こえたような…ぶつぶつと呟くような音みたいな…」  
すると二人の顔がおつ！…というような顔をした。

「それは聖歌です、聖遺物を扱えるようになる適正のようなもので私の場合だとはつきりと声が聞こえます」

「へえ…そなんだ」

「L i N K E R つていうものを使えばもしかしたら私たちのように装着することが出来るかもしねないな」

と、言われてもなあ…L i N K E R は副作用もあるみたいだし…

…待つて、というかその聖歌。僕男なのに聞こえちゃつたの？

僕は別にブレイブの恋人の記憶は持つてないし女性の遺伝子は0だと思うんだけど

「僕はああいうことは出来そうにないかな…」

「ま、無理強いはしないさ。一応櫻井女史に伝えておくけど」

「うん、分かつたよ」

そういういえば天空時恋香が話に入ってきてないけど何をしてるんだろう：

視線を向けると天空時恋香はテーブルに並べられた料理を大量に食べていた  
んー！…と声を上げながら料理を次々口に運んでいた。

凄い空皿が…というかシスターじゃなかつたのか…節制とかあるんじやないだろうか

「…というか4~5人前は食べているんじやないだろうか…  
「とてもおいひいです！」

「て、天空時さん…？」

「…ハツ！これは堕落ではないのです！出されたものを残すのも神の意に反するのです  
!!!」

天空時恋香はこつちを確認すると真っ赤にして言葉を否定する。

でも右手に持つてゐる4切れのケーキが乗つてゐる皿で説得力がなくなつてるよ

その後、フラフラな響ちゃんが戻つてきた。

僕達は緒川さんに送つてもらい、そこで二人とは別れた。家に到着すると先ほどアメノハバキリを見ていた時に作成した。ガジエットを取り出す。

「まさか本当にできるとは思わなかつたなあ…」

ガングニールに続く新しいガジエット、アメノハバキリ

ガングニールの色が黒とオレンジなのに対しアメノハバキリは青と白である  
明日は響ちゃんの初陣である、久し振りのアラインとしての参戦である。  
付き合い長いからばれないよう気を付けないとなあ…

# 歌唱、前世の歌

奏 side

大学で色々出来るのはいいが人は遠目に見てくるだけだし

話しかけようとしてもビクビクされるし：ちょっとめんどくせえなあ

というわけで中庭をぶらぶらと歩いていると飛鳥を見つけた。

近くには友人の：確か鏡と花屋だつたか、それもいる

あそこは確か：生徒がバンドとかの練習が出来る防音会場だつたか

この大学も凄いよな：こんなのもあるとか

こつそりと入つてみると三人がステージに立つており飛鳥はギター、鏡はドラム、花屋はベースを持っていた。

ステイックの音が三回響くと共に曲が始まる

【禁断のレジスタンス】

飛鳥の高い声に合わせてポップな曲が流れ出す

少し悲しい曲だが曲と飛鳥の声も相まってとても激しい曲に感じる。

それでも聞いたことがない曲だ、こんなにいい曲なら耳に入るとは思うんだが

曲が終わると同時に私は拍手をしながら出ていく、三人は驚いた顔を見せた。

「か、奏さん?!」

「あ、天羽奏?!」

「…本物だ」

三人は驚いた様子を見せるが私はそのまま私は会話を続ける。

「さつきのはいい曲だつたな、聞いたことないけど誰の曲なんだ?」

「いいい…今のは飛鳥がつ、作つた曲…です！」

鏡が声を震わせながら説明をする…つて

「あの曲飛鳥が作つたのか!!!」

「(びくつ)…え、う、うん一応僕が…作つたものだけど

さつきの曲を思い起こす、曲も歌詞もとても洗礼されており普通に発売されていてもおかしくないレベルだ

これを個人で作成していたのか：歌もかなり上手かつた：普段からボイトレとかをしているのだろうか

……緒川さんに頼んでスカウトも視野に入れるか…?

うむうむと悩んでいると飛鳥から声をかけられる

「そういえば奏さんはなんでこちらに?」

「こつちに入つていくのが見えたんでな、こつちにはいつもいるのか？」

「いや、時々弾きたくなつた時とかに誘つて…息抜きにもなるし」

その後歓談していると気分がよくなつたのでちょっと合わせて歌つてみた。鏡と花屋は感動したようで喜んでくれた。

### 飛鳥 side

驚いた、昨日はまさか天羽奏が参戦してくるとは

前世で聞いていた曲を書き起こして三人で弾いていたら来るのは

自分で作つた曲とか言つちゃつた、でも前世の曲ですか言つてもおかしいとしか思われないしなあ…

というわけで家に帰宅した僕は動画投稿サイトに前世で聞いていた曲を投稿しようしていた

これは単純に僕が聞きたかったというのもあるけど、もしかしたら前世の人も見つかるかもしれない

と思つて送つてはいる、今までメールが来たことないけど

本来は【禁断のレジスタンス】を投稿する予定だつた、でも天羽奏に聞かれてしまつたので

つい先ほど完成した「革命デュアリズム」の方を投稿する。

歌は僕が歌つている、曲は鏡と花屋に手伝つてもらつてその他の楽器は打ち込みでかなりの再限度だと思う、正直完成した時ガツツ。ポーズをした。

投稿が終わるとパソコンを閉じていつも通り鍛錬を行なう

そういうえば今までの投稿つて再生数とか見てないな、まあいつても1000ぐらいかな

特に気にしなかつたのでふと思つたけど…まあ、いいかな

今日は軽く走り込みをして体の調子を整えて、夜は響ちゃんの初陣とアラインとの顔合わせだ

天羽奏が生存しているから原作のいざこぎはないと思う

しかし響ちゃんに敵愾心を抱かせないといけない…うーむ…ツヴァイウイングの二人を攻撃する？

だけども暴走状態になられても困る…うーむ、最初は二人が敵対している相手つて認識にしておこうかな

アメノハバキリのガジエットを手でもてあそびながら思考する。  
イチイバルのガジエットも作りたいし…雪音クリスとの接触も考えなければ…  
あとは…フィーネをどうするか…

正直に言うなら フィーネ／櫻井了子 は生存させたい、知識も重要だし…強いし  
しかしそれだとフロンティア事変が…隠れてもらうとか…うむむ…

：『俺』の目的はシンフォギア奏者を倒すことでも壊滅させることでもない  
だが『俺』の目的を達成するのは敵対をする必要がある。だから『俺』は彼女達と敵  
対しなくてはならない

面倒だけど、あゝあ。もつと簡単にできりやあなあ…

…あれ？ 何だろう今の声…僕の…声？

ぐ…思考が乱れる…お昼過ぎてるし…何か食べようかな…

ふと何かいい店がないかと辺りを見回してみるとお好み焼き屋の『ふらわー』という  
店を見つけた。

お好み焼きか…最近食べてないし、そもそも外食自体久し振りだし…入つていこうか

な

見せに入ると昼時を過ぎたからかお客様はそんなにいなかつた。これならすぐに  
食べられるかな

「いらっしゃい」

席に着いて水をもらいメニューを見る、これはシンプルに豚玉を頼む

自分で焼くかどうかと聞かれたけど、結構お腹が空いでいるので作つてもらうことにした。

ソースの匂いがとても美味しそうである。楽しみに待つていると入り口が開かれた「おっぱちやーん、今日も来たよー！いつものーー…つて飛鳥さん！」

「もう響、大声出しちゃ…あすかさん？」

大口開けて驚いている響ちゃんと見慣れない白いリボンをつけた女の子がいる。もしかして…小日向未来かな？

「飛鳥さんもここに来るんですね！」

「ここにちは響ちゃん、初めてここには来てみたんだけど響ちゃんはよく来るんだね」「はい！常連です。あつ！紹介しますね！親友の未来です！」

「初めまして、小日向未来といいます。響とは幼馴染でルームメイトです」

ペこりと頭を下げて小日向未来は挨拶をしてくれる。

ちよつとだけ警戒の色が見えるから人畜無害だよオーラを出しておこう（にこー）

「初めまして、僕は黒野飛鳥。大学二年生で響ちゃんとは響ちゃんが中学の時に知り合つたんだ」

「…もしかして、響が前に言つてた」

「うん！ そうだよ！」

そのまま会話を続いていると僕の前にお好み焼きが置かれる。

うーん、とてもおいしそうである。響ちゃん達に断りを入れて割りばしを割る一切れを口に運ぶと思わずんーと言う声を上げてしまう、とても美味しい次々と口に運んでしまう

「…飛鳥さんつて凄く美味しそうに食べるね」

「…響もあんな感じだよ…食べ方凄い綺麗だなあ…」

何か言われているけどあんまり気にしない

大変美味しい食事のあとお茶を啜りながら会話をしているとふと小日向未来が声を上げる

「あ、そういうえば響。新曲上がつてたよ」

「えっ本当!やつたー、帰つたら聞かなきや」

「ん?何のお話?」

すると響ちゃんが携帯を見せてくれる。

そこには……動画投稿サイトの僕のユーチューバージがあつた

「黒い鳥さんっていう人なんですかね!とてもいい曲を投稿してくれているんですよ！」

響ちゃんがとても詳しく説明してくれているが僕は見てしまった。再生数を

そこには7桁の再生数が表記されていた…コメントも6桁…お気に入りも7桁…

…マジですか、と変な顔をしてしまう

「… という感じで… つて飛鳥さん? どうかしました?」

「な、何でもないよ!」

「そうですか… あつ、そういうえばこの歌声つてよくよく聞いてみれば飛鳥さんが歌つている声に似ていますよね! もしかして飛鳥さんが歌つてたりして…」

「…」

図星を突かれて思わず固まってしまう

今効果音を表すとすると『ピシッ』って感じだろうか

響ちゃんは笑顔で固まり小日向未来は驚いたような表情を見せた

数秒の硬直のあと響ちゃんが声を上げた

「えええええええ! これ飛鳥さんが作つてたんですか!」

「響、声が大きいよ」

「あはは… ちょっとした趣味で投稿していたんだけど…まさかこんなことになつてると

はなあ…」

コメントを見てみると絶賛されている

元々僕が作ったものではないからどうにも素直に喜べない

「凄いですよ飛鳥さん！」

「でも本当に凄いですね」

その後…一人からの褒め殺しにたじたじになりながらも別れた  
あー、褒められるのはどうにも苦手だ…褒められることをしているわけでもないし…  
体の調子を整えて戦う準備をしよ…アラインに変身するのは久しぶりな気がする。  
最近ノイズも来なかつたし…

そして夜

町はずれの道路が見えるビルの上、ノイズが数体見ることができた

「さて…行くか」

僕はベルトを装着するといつものようにギャングニールのガジェットのボタンを押し

た

『BEYOH E R L D G U N G N I R!!』

「…変身」

『… T Y P E T R O N』

# 激突、二課V.Sアライン

「はあつ！」

「中々筋がいいじゃないか立花」

ノイズに拳を振るい、ノイズを炭化させた響に翼は褒める

「あとはアームドギアが使えれば完璧だな！」

「あーむどぎあ？」

奏の言葉に響は首をひねる

二人は手に持っている槍や剣を掲げる。

「固有の武器のことだな、私ならこの槍とか。響のもギャングニールだから槍かもな」

「槍かあ…使えるかな」

そんなことを言いながらノイズをほぼほぼ倒し切ると三人は力を抜く

「今日も…来ないのか」

「そうだな…」

「…そういえばたまに辺りを見渡していますけど誰かお探しなんですか？」

鋭い雰囲気が消えない二人に響はすっかり気の抜けた顔で尋ねる。

「ああ…そういえば響には言つてなかつたな…実は」  
 「俺をお探しかな?」

「「!?」」

飛鳥 side

アラインの力を使い、会話を聞きながらいいタイミング跳躍して三人のそばへと飛び  
 行くぞ! スーパーヒーロー着地だ!!!  
 ドゴォンッ! という凄まじい音を立てながらスーパーひーロー着地を決める  
 ……いつたあああああ!!!膝が! 右膝がすごく痛い!!!  
 拳を地面に叩きつけて衝撃緩和してアラインの装甲もあるのにすごく痛い!!!  
 実践向きじやないよこれ! スーパーヒーローは凄いね! 本当に!  
 めちゃくちや痛む右膝を痛くないようにごまかしながら立ち上がる。  
 ゆっくり立ち上がって三人に視線を向ける。

「やあ、久し振りだねツヴァイウイングの二人。そして初めまして。立花響くん」

「誰…? お二人の知り合いで…」

その瞬間、二人が響ちゃんをかばうように前に立つ  
 二人は鋭い視線を僕に向いている、響は困惑顔だ。

「やれやれ、挨拶に来ただけだというのにそのような対応は傷つくねえ…」

少しオーバーリアクション気味に手と頭を振る。

「おっと、自己紹介が遅れたね。私の名前はアライン、仮面ライダーアラインと呼んでくれ」

「え、えつとアラインさん…こんばんはです」

響ちゃんはぎこちなく挨拶してくれた。いい子だねやつぱり

「はあっ！」

すると突然風鳴翼が襲い掛かってきた。

その一撃はすんでのところで回避する、正直危ない。よく回避できた自分

「手厳しいな風鳴翼、もはや一年も前のことだろう？」

「何年経とうと貴様が奏を傷つけたことは変わりない！」

実をいうと風鳴翼の攻撃をギャングニール形態で避けるのは中々に骨である

ギャングニール形態はバランス型ではあるが攻撃力が少し高い感じだ  
力：110 速さ：90 防御：100 といった感じである。

風鳴翼の攻撃は素早さ重視なのか攻撃がとても鋭く速い  
防御と力が低い代わりに速さとクリティカル率が高い感じだ、正直かなりきつい  
と、いうわけなので

「…はあつ！」

多少のダメージを覚悟して無理やり剣を防ぎ、そのまま腕を振るい風鳴翼を吹き飛ばす

風鳴翼は空中で体勢を立て直すと二人のそばに着地する。

「やはり君の相手は辛いものがあるな…新たな力を試してみよう」として取り出すのは、新たに作成したガジェット

白と青で構成されたそれを構え、スイッチを押す

『C H A N T H O D A M E N O H A B A K I R I !!』

「天羽々斬：だとつ!?」

「偏換：」

『⋮ T Y P E A R R A N G E M E N T』

アラインのオレンジ色の装甲がカブトシリーズのキャストオフのようにスライドしてページする。

すると黒の素体ボディになり、その色が黒から白へと変わる。そして何処からともなく飛んで来た青色の装甲が体に派手な音と共に装着された。

これが仮面ライダーアライン、アメノハバキリ形態である。

ガングニール形態はどちらかというとクローズマグマに近いデザインをしていたが、アメノハバキリ形態は刺々しい。ぱつと思いつくデザインはないが、いうとするなら細身になつたG3-Xだろうか。

ガングニールを取り出しソードモードに変更しようとすると突然ガングニールの外装が弾ける。

すると日本刀に近いデザインの青と白の剣に変化した。

軽く振り回すとともによく手に馴染むまるで十年来の相棒のような感じだ、ガングニールもそうだが

まるでずっと使い続けていたかのような感じがあるのはなんのだろうか、まあいいガングニル：いや、アマハバギリを肩に担ぎ。左手で指を折り曲げる。かかつて来いよつていうサインである。

風鳴翼は目つきを鋭くするところへと突貫してきた。

「剣で私に挑むとはツ！打ち倒してくれるツ！」

「Bringing it on」

刀と剣がぶつかり合い、火花が飛び散る。速いが：先ほどよりは全然見えるな  
力：80 速さ：140 防御：80 といったところだろうか

問題は僕が刀を使つたことがないということだろう、これは訓練が必要だな

「どうやら剣には慣れていないようだな！」

「あいにく使うのは初めてでな、だが…それで問題ないようだ」  
「何ッ!?」

速度を今までの3倍に上げた。ちなみに最速で5倍まで行ける。疲れるけど  
高速で刀を振ると風鳴翼は苦しそうな表情をする。ここだ

僕はガジエットを抜いてアマハバキリの柄に差す、すると淡く青色に光りだした  
これでアマハバキリを高速で動かせるようになるというわけで

ここで僕はある構えをする。

刀を構えた右手を右こめかみ辺りに持つてきて刀を前に向ける。  
腰を少し落とし、刃の先端を風鳴翼に向ける。

これは別に必殺技でない、ただの技術で技である

「秘劍…！」

「しまつ…ッ！」

風が消える、音が止む

まるでスローモーションのように風鳴翼の驚愕する顔が見える

風鳴翼

水面のように穏やかな心で敵を見つめながら  
刀を三回、高速でほぼ同時に振りぬいた。

「…燕返し」

原作では多重次元屈折現象を引き起こし、並列世界から呼び込まれる3つの異なる剣筋が同時に相手を襲う技だが

こつちではただの三つの斬撃である。こちらではほぼ同時にしているだけだけど

「あつ、ぐつ、きやあつ！」

斬撃は風鳴翼の左肩、右肘、左膝へと直撃した。峰打ちにはしたが鉄の棒で殴られているようなものだからかなり痛いだろうけど。彼女は軽くない衝撃を受け、後方・天羽奏達がいる所へと吹き飛ばされた。そのまま地面を転がる。

「翼ッ!?あの野郎一瞬で…響！翼を頼む！」

「えつ！あつ！はい！」

今度は代わるように天羽奏が突っ込んできた。流石にギャングニールにアメノハバキリ形態だと不利なので

『BEYONHERLD GUNGNI R!!』

「偏換」

『⋮ TYPE ARRANGEMENT』

簡易変身でさつきよりも数倍速く装甲が変更される

一度プロセスをしつかり見せると次からは変身も早くなるあの現象である。

武器もアマハバキリからガングニルに変更され、ランスマードに変更し攻撃を受け止める。

風鳴翼は攻撃面でダメージを与えたが天羽奏は精神面でダメージを与えることにす  
る、原作だと精神的に強いのかよく分からぬから精神面を調べてみるとこのこともか  
ねて

「翼と響は私が守るッ！」

「⋮くくくつ。守る⋮お前が守るか⋮」

「何がおかしいつ！」

鍔迫り合いを続けながら天羽奏にだけ聞こえるように話す

「守れなかつたからいまこに立花響がいるんだろう？」

「⋮ッ！」

槍の力がわずかに弱くなつた。表情からも動搖が見える。  
さらに追い込むために言葉を続ける

「それで守るだと？笑わせる」

「黙れ黙れ黙れえつ！」

「団星を突かれて焦つたか？攻撃に力が入つてないぞ？」

天羽奏は武器をやたらめつたらに振り回す、顔は憤怒に染まつており武器の威力もあまりない

片手でも簡単に止められるほどである。

そのまま言葉である程度投げかけると奏の顔色が段々と青くなつていく

槍を振るう手にも力が入つていない

最後に顔を思いつきり天羽奏に近づけて、断言するような声で告げた

「天羽奏、貴様には何も救えない」

「私は…私は…」

「ふんっ！」

力のなくなつた槍をこちらの槍で吹き飛ばし、回転蹴りを胴体へと浴びせる。

天羽奏は何も抵抗せずに吹き飛ばされ、地面を転がつた

ここで感情を昂らせる、心底期待を裏切られたといった感じで

「この程度か…？この程度なのかな？貴様らには失望したぞ…！俺の目も曇つていたなこんな奴らに期待するとは…」

そう踵を返し立ち去ろうとすると…

「待つてください！」

「…？」

響ちゃんが声を上げ、振り向くと響ちゃんが二人を守るように前に立つて構えていた。

中国拳法の構え、指令に戦い方は教わるのはまだ先だと思つていたけど。僕が介入したから何か変わったのかな

「私が戦います！」

「ほう…君がか？」

出来るだけ威圧感を出しながらゆっくりと振り向く、響ちゃんはびくりと体を震わせるがすぐに体勢を立て直す

僕はガングンニルを捨てて響ちゃんと同じ構えを取る。

中国拳法は一時期習っていたのである程度は使える、ある程度我流の構えになつてゐる  
けど

「師匠と同じ…」

「ふん…」

僕はかかってこいと言わんばかりに手招きをする

まるでマトリックスのワンシーンのようだ  
響ちゃんは大きく姿勢を下げるところからへと突進してきた

## 激戦、アライン VS OTONA

「やああああああああああああああああ！」

響ちゃんが拳をこちらに振るつてくる。僕はいつかの指令のように左手を後ろに回し、片手でその攻撃を防いた

多少修業したと言つても所詮は普通の少女だつた子

数年間修業した成人男性には見劣りする、シンフォギアもライダーシステムによつて差異はない

「くつ、当たらない…！」

「単純に拳を振るつているからだ。重要なのは手数ではない、どこを打つかだ。こんな風にな」

「うわわっ！」

響ちゃんが振るつた手の手首辺りに自分の手首を当てて大きく外側に弾く、力の行き場が変わつたせいで響ちゃんは体勢を崩し倒れそうになる、そして僕は手のひらを響ちゃんの腹部に当てて発勁を放つた

「うぐっ！」

発勁をもろに受けた響ちゃんは苦しそうな声を上げて後ろに吹き飛ばされた。

「戦闘でもつとも大事なのは相手の動きを見ることだ、やみくもに突っ込むだけではこの様にいなされる」

すぐに立ち上がるが腹部を押さえて苦しそうにしている。見知った人が苦しそうな顔をするのを見るのは辛いなあ

そう思つているとアーラインの優れた聴覚がヘリの音を聞きつけた。

元々この場面は風鳴翼が響ちゃんと戦おうとしているところに指令が飛び込んできて中断させる、というシーンである。

今回は僕と響ちゃんが戦つている。つまり司令と戦うのは僕

いやだなあ：仮面ライダーに圧勝できる司令と戦うのやだなあ：

そんなことを思いながらもベルトの上を叩いて必殺技の準備をする。

『GUNGNIR!! CRITICAL STRIKE!!!』

「終わりだ…」

僕が姿勢を低くすると右足が輝きだす。

そして大きくジャンプし、回転して響ちゃんに向かつて蹴りを放つた。

響ちゃんが絶望した顔をした瞬間、上から何かが飛来してくる音が聞こえた。

「響君つ！ ハアアツ！」

僕の必殺技を上から飛来した司令は僕と同じように片足を伸ばしたライダー・キックのようなポーズになり、僕の攻撃を防いだ。

…待つて、多少力を抜いたとはいえたライダーの力を使つたライダー・キックだよ。

それを生身でしかも特に落下しただけの威力で防いだの？

……本当に人間なお？

「…来たか、風鳴弦十郎」

「久しぶりだな、アライン」

風鳴弦十郎と対面する、後ろにいる響ちゃん達は緒川さんが回収したようだ。

ただ立つてゐるだけなのに強さがにじみ出でる。この人本当に人間なんだよね、人間に化けてゐる怪人とかじやないよね。いや、怪人だつたらラスボスクラスだけど。

僕達は構える、言葉はいらない。姿勢を低くすると僕達は二人に向かつて跳んだ。

拳と拳がぶつかり、衝撃波が発生し近くのアスファルトが吹き飛ぶ。

正直かなり痛い、鉄以上に固いんだけど…

即座に体を回転させて後ろ回し蹴りを頭に放つが腕でガードされる。前よりも動き

にキレがある、これは…

「…仕上げてきたな」

「お陰様でな」

お返しとばかりに鋭く重量感のある蹴りが僕の顔に目掛けて繰り出される。

それを同じように腕で防ぐ、車が衝突でもしたのではないかという威力に腕が痺れ  
た。

無事な方の腕を地面につけてカポエイラのように足を回転させて薙ぎ払うように蹴  
りを繰り出す。

一度距離を取ると再度攻撃を数回行う

正直、勝てる気はしない。

あんなのスーパーヒーロー大戦に登場したら一人でライダー全員倒しそう、四人に増  
えたてつをと戦えそう。

そう思考がわき道にそれた瞬間、目の前に風鳴弦十郎の足が迫っていた。  
しまつ…！

その蹴りは僕の顎をかすめ脳を揺らし、僕は意識を失った。

# 登場、ダ・カーポ

「む…完全に意識を刈り取つたと思つたのだが」

アラインの頸を蹴り脳震盪を起こし、意識を落としたと思つたが

蹴られたアラインは一度糸が切れたように全身がガクツとなつたがすぐに持ち直し、頭を軽く振ると起き上がつた。

そして立ち上がつたアラインを見て違和感に気づく

先ほどと態度が違う

先ほどまでのアラインは眞面目で正統派

落ち着いた雰囲気で真っ向に正々堂々と戦う、言わば冷静な悪役

だがこのアラインは違う、頭を振り手を振りやれやれと言つたような雰囲気

そのアラインは特に構えを取らずに先ほどとはまるで口調が違う

風鳴弦十郎は警戒を解かずに多少距離を取り構える。

「ああ～ようやく前に出れたぜ」

「…」

「そういやあ戦つてゐる最中だつたな。風鳴弦十郎か…まあ問題ないな」

「ツ！」

その瞬間、アラインではないのか？お前はなんだ？」

風鳴弦十郎はそれを僅かながらも恐れた。そう、恐れたのだ。あの風鳴弦十郎が

「しつかしやつぱアラインじや多少荷が重かつたか。やっぱ素人が作つたものだとこの程度か」

「…お前、アラインではないのか？お前はなんだ？」

それを聞くとアラインだつた者はクスリと笑い、後ろの腰に手を回す  
取り出したのはおもちやのような銃と小さなボトル

「オレはなんだ…か、そうだな。オレのことは…」

やつはボトルを数回振るとキヤップを回し、銃口の下にボトルを差し込む

『B A T』

「ナイトローグと呼んでくれ……蒸血」

『M I S T M A T C H』

ナイトローグは引き金を引くと銃口から煙が噴射し、全身が煙に包まれる。

『B A T B A T . . . F I R E！』

煙が晴れると先ほどとは違う黒い装甲、胸元と顔には黄色の装甲。

ナイトローグは銃を仕舞うと体を慣らすかのように動かし、こちらへと体を向ける。

「これが本物の力だ、お前ほどになるとわかるだろ?」

風鳴弦十郎はわずかに冷や汗をかいたことに気づく

そう、先ほどとはまるで感じる威圧感が違うのだ、手も足も出ないかも知れない。

そう感じたのは初めてだつた。頬にその汗が伝う  
「…来な」

「ハアッ!!!」

ナイトローグが手招きしたと同時に風鳴弦十郎はナイトローグへと車すらも簡単に吹き飛ばせるその拳を振るう。しかし

「おお、強いな」

「なにつ!?」

ナイトローグはその拳を片手で受け止めた。

「このナイトローグよりも少し弱いほどのスペックか、生身でそれとは凄いねえ

「ぐつ…ハツ!」

風鳴弦十郎は掴まれた手はそのままにナイトローグの顔に蹴りを放つがその蹴りももう片方の腕の肘でガードされる。

後ろで見ていた、立花響はその光景に驚愕する。

そもそもそうだ、人類最強だと思われていた風鳴弦十郎がまるで子供のように扱われて

いる。

その後も風鳴弦十郎は攻撃を続けるがナイトローグはそれを両手だけで防ぐ

「諦めろ、今のお前ではオレに勝てない」

「まだ分からぬんだろう、戦いは最後まで分からぬもんだ」

「違う、オレには勝てない。そう決まつていいんだ」

ナイトローグが一瞬の隙をついて風鳴弦十郎の腹部に手を置く

「発勁」

ズドンッ！という周りの大気が音とともに震える。

「ガツ……」

腹をネフシュタンで貫かれてもすぐに動けるようになつていた風鳴弦十郎が一撃で地面に倒れる。

立花響はもちろん、ツヴァイウイング。緒川までも驚愕していた。

「今日はこんなところか？」

ナイトローグは首を軽く鳴らすと立花響達の元へと向かう

その途中で立花響と緒川がツヴァイウイングをかばうように立つ

「あなたは何が目的なんですか？」

立花響は鋭くナイトローグを睨みつける。

するとナイトローグは何かを立花響に放り投げる。立花響はそれを思わずキャツチした。

「なに…これ…」

「お前にとつて必ず必要になるものだ。お友達を救いたければ持つていいがいい」

渡されたのは鎖の付いた赤い宝石と小さな灰色のボトル

「これは…聖遺物!?」

「なんでこんなものを目的は何なんですか!…どうして私たちを倒したんじや…」

「勘違いするな」

ナイトローグは私達に背を向け、告げる

「オレの目的はお前たちの排除ではない」

「だつたら…一緒に戦うことは出来ないんですか!」

「…無理だつた」

「…え?」

「……さらばだ」

そういうとナイトローグは銃から煙を吹きだす、すると全身が煙に包まれて消えた  
「友達…」

立花響はそのボトルをもつて小さくつぶやいた。

なんで僕、部屋で寝てるんだろう。

おかしいな、風鳴弦十郎に脳震盪起こされて気絶したと思つたんだけど  
時計を見るとあれから一時間ぐらい…

どうしよう…みんなに正体がバレちゃつたりしたのかな  
…あとでみんなの反応を見てみよう

もつと修行しないとなあ…

## 協力、記憶との違い

「…ふう」

僕はバイクから降り、ヘルメットを外す。

今いる場所は私立リディアン音楽院、の二課へと向かっている。

「手土産もよし、さてと…」

僕がここに来たのは小日向未来から響ちゃんがまだ帰つてこないということを聞きまだ二課にいるのだろうという風に当たりを付けてこつちに来ている。

正直僕も戦つてる最中から記憶がないから情報を集めたい

門の方に行つてみると二課の人が割とすんなり通してくれた。

関わっているからだろうか、とりあえずエレベーターに乗つて地下まで降りる。

到着すると緒川さんが出迎えてくれた。

「こんばんは緒川さん、響ちゃんいますか？」

「黒野さん…ええ、こちらにおられますよ」

心なしか疲れているような緒川さんに連れられて部屋に入ると

ソファでぐでえとなつている奏者の三人を見つける、でも僕はそれよりももっと驚く

ものを見つけた。

違うソファで仰向けになつてうめいている指令の姿を見つけたのだ。  
司令がやられている…？

もはやノイズ以外に倒せないものはないと言われている指令がやられた…？  
誰に？僕が気絶した後誰か来たの？しかも指令を倒せるほどの？

僕と同じ転生者？しかもチート能力持ちの…ダメだ、分からぬ。とりあえず話して  
みよう

「風鳴さん！？それにみんなも…いつたい何が…？」

再度目を向けてみると奏者の三人には深い傷はなく響ちゃんは無傷と言つてもいい  
ほどだ

だけども顔を俯かせおり、見たことないようなおびえた表情で震えている。

顔色も青く、よほど怖い目に遭つたのか僕が來たことにも気づいていないようだ

「響ちゃん…？」

「あ…飛鳥…さん…？」

「大丈夫…？だいぶ怯えているみたいだけど」

頭でも撫でようかと手を伸ばすと響ちゃんはその手を掴みその胸に抱きかかえる。  
不安になると何かを握りたくなると聞くしそのままにさせる。

響ちゃんの高校一年生にしては大きい胸部の感覚は無視する。やつぱり男なんだなあ……って自覚してしまう。いまは不安がっているしおくびにも出さないけど

「飛鳥、お前も来たのか」

「…黒野さん」

ツヴァイウイングの二人も顔をあげた。

二人は疲れ切った表情をしておりソファにぐつたりと倒れている。

「…何があつたか聞いてもいい？」

「それは俺から説明しよう…一人は響君のために知つてゐる者がいた方がいいだろう」司令が起き上がつた、多少はきつそうな表情を見せるが動く分には問題ないようだ。そのまま近くにいた櫻井了子に言うと画面が表示される。

僕が何度も見ているアラインの姿だ。

「この特殊なスーツを着た男、名前は仮面ライダーアラインというが…」

「…あれ、僕この人を知つてますよ」

「何ッ!?どこでだ！」

「ここからは演技力しだいだ、頑張れ僕

司令は驚いた表情で僕を見る。近くにいる奏者の三人も驚愕した表情を見せる。

「えっと……二年前の……：ツヴァイウイングのライブ会場で」「――一ツ！」

四人の顔が驚愕に包まれる。それもそうだろうね：

あの場所は本当の意味での：『始まりの場所』なんだから

「…僕はノイズが現れた時、怖くて動けなかつたんです。このまま死ぬんだつて思つた時にあの人来たんです」

「はじめは何がなんだかわかりませんでした。顔は仮面に覆われてましたし」

「その時の僕はまたノイズみたいな化物が出たと思つていたんですけど」

「彼は僕を抱えるとそのまま彼が開けたと思われる穴から外に出してくれたんです」

「結局声も聞くこともなくそのまま彼は行つてしまひましたけど…」

「時折噂になつていた『仮面ライダー』<sup>デマカセ</sup>って彼のことだつたんですね」

□から流れるように感動話が出てくる。

今僕は彼に助けられた。民間人

なぜこうすることにするのかにはとある理由がある。

ここで本腰を入れてアラインを討伐されても困るからだ。

戦力的に考えるとアラインなんて指令と緒川さんをぶち込まれるだけでやすやすと撃破される。

ノイズとは真逆、奏者には有利をとれるがOTONAには歯が立たない。

まるでじやんけんのような見事な有利不利が出来ているのだ。  
ここで僕はアラインとは何なのか、本当に私たちの敵なのか…?と疑問を持たせるようとした。

これで僕を撃破しようという可能性はわずかながらでも減るだろう。

その後、アラインとは敵対しているなど。天羽奏が一時休業していたのは彼のせいだなど。

様々な情報をいただいた。その時そんな…という驚く演技も忘れない。

というか司令が戦つたという話を聞いた時はとても驚いた表情をして奏者達を見た。  
：彼女達は慣れろ、といった表情をしていた。うーんこの反応もびっくり

そして僕が知りたかった情報が来た。

「…そしてアラインを倒したと思つた時、やつが出た」

そして映し出されたのは…え？

ナイトローグ…?

そこに映っていたのは仮面ライダービルドに登場するナイトローグ  
仮面ライダーのような変身方法だが分類としては怪人である。

バットフルボトルを使うコウモリような姿をしており、確かにパンチ力は15tを超える

て いるし。キック力に至つては 20t はあつたはずだ：

ア ラインもそこそこの攻撃力を誇るが本来の仮面ライダーほどのスペックはない。

しかしこのナイトローグが本来の作品のスペックがあつたのなら…司令を簡単に倒すことが出来るだろう。

「…やつはナイトローグと名乗つていた。そして…恐ろしいほどに強かつた」

司令は苦々しく告げる。彼のことだから油断はしていなかつたんだろうがそれで負けたのだ。かなり悔しいのだろう。

しかし…いつたい誰だ：ナイトローグ：僕と同じ転生者？しかし何のために…

また調べることが増えたなあ：仲間が欲しい

こう：キリヤさんとかそういう感じの明るい仲間が欲しい。でも社長とかの権力持ちも欲しい…

あ、そうだ。これも渡しておこう

「あの…こんなところで言うのもあれですが…これ…よかつたら…」  
と言いながら僕は手に持つていた紙袋を差し出す。

響ちゃんもだいぶ持ち直したようで紙袋をのぞき込んでいる  
「この匂い…もしかして…飛鳥さんのシュークリーム!?」

「うん、そうだよ。何か持つて行つた方がいいかなつて…」

「へえ、飛鳥が作つたシュークリームか、多彩だな」

そういうながらみんなはシュークリームを取つていく、風鳴翼も21時前なので食べるようだ。

さつきとは別の意味でドキドキする。響ちゃんは喜んでくれたけど……というかもう笑顔で食べてるけど…

「飛鳥さんのお菓子相変わらず美味しいー」

「うまっ」

「これは…！」

「ほう、美味しいわね」

「あら、美味しいわね」

…どうやら好評だったようだ。ほつと胸をなでおろす。

これからはナイトローグの調査と…響ちゃんと小日向未来の関係改善。

それと二課との親密度上げ

…流星群に行かせることが出来ればいいんだけどね。

# 閑話、一つの結末

「おい……誰か……！誰かいないのか……！」

荒廃した街で一人の青年は瓦礫を踏みしめながら誰かを探すように辺りを見渡す。あるのは瓦礫、炎、死体。生きている人間は見えない。

「響！・奏！・翼！・クリス！……」

青年は愛する彼女達の名前を呼ぶ、必ず守ると誓った彼女達の

「マリア！・セレナ！・切歌！・調！……誰か！！！誰か返事をしてくれ！」

そして彼は彼女達を見つけた

「そん……な……」

ただし、死体として

全身に多少の傷はあるが、全員はまるで眠るかのように生命活動を終えていた。

青年は膝をつく、守ると決めた。これからずつといふと思つた少女達がみないなくなつた。

いるのは自分だけ、目から涙があふれ。こぶしを地面に叩きつける。

「なんでだよ!!あんな敵！原作にはいはないはずだろ!!なんで…響達が…」

青年はさらに慟哭する。

「俺は……この力を使つて皆を守つて……幸せになりたかつただけなのに……なんで……皆が死ななくちゃいけなかつたんだ……！俺が全部守るつて……言つたのに……」

「なるほど……」

だがその青年の慟哭は

「……弱くなつていたのはお前が原因だつたか」

「……誰だ!?」

青年が声のした方を見ると一人、生きている者がいた。

ぱつと見は20歳ほどの女性、だが口調は男のものであり。声も二重に重なつたような男性のような女性のような不思議な声になつてゐる。

それに青年はその人物は普通の人間ではないことに気づいた。  
目が、赤く光つていたのだ

「……お前、何者だ」

「おや気づいちやう？残念ながらこの惨状を引き越したものではないが……この惨状になるのを知つていて見ていた者ではある」

「何ッ!?」

その青年は正義感あふれる怒りのこもつた目を向ける。

だがその人物は呆れたような：いや、実質呆れているのだろう。目を伏せて大きくなめ息を吐く。

見た目がとても美しい女性なのでその動作もかなり絵になるが：青年は無視して続ける。

「なぜこうなることを知つていて黙つていた!!! そうすれば……！ 韶達は死なずに済んだかもしれないのに!!」

「なぜか……か……いうとするなら……韶達に……主人公達の乗り越えて貰いたかつたからだ」「何……？」

「知つているとは思うが……『ここ』ではオレ達は異物だ。本編では存在せず。まるで二次創作のように現れて勝手に物語を改変していく存在だ。」

『俺達』……つてまさか……！」

するとその人物はフツと笑い。何かを取り出す。

「それは……！」

「せつかくの試運転だ……変身できるか試させてくれ」

『COBRA』

「……蒸血」

『MIST MATCH』

『CO COBRA・COBRA・・・FIRE!』

「ん、んく～中々いい感じだ」

「お前：スタークだつたのか……！」

すると青年も顔を怒りで染め、ベルトを取り出した。

青年はそれを腰に装着すると小さなおもちゃの剣のようなものを取り出し、ボタンを押した。

『M I C H T Y A C T I O N X !!!』

「変身ツ!!!」

青年はそれ：ガシヤツトをベルトに装着し、仮面ライダーイグゼイドに変身した

更に青年は金色のガシヤツトを取り出す

『H Y P E R M U T E K I !!!』

「さらにだ!!!ハイパー大変身!!!」

これで青年は仮面ライダーイグゼイド ムテキゲーマーとなつた。

本来はこれで一切の攻撃は通じず、一方的な戦いが始まる。

実際、青年は今までそれで戦つてきた。ムテキだからこそ。彼女達を守れると言つて  
いたのだ。

「お前に勝ち目は一つもない!!!」

青年は決め台詞のようものをいうと構える。だが、スタークは溜息を吐く

「今まで見ていたが何かあつたらすぐムテキに頼る、お陰で戦い方は素人の喧嘩レベル、奏者達の訓練にも参加せずにギャルゲーでもしたいのかというようにするばかり。だからこそ…」

するとスタークは見たことがないものを取り出す、ボトルの差込口が二又に分かれている…なんというかソケットのようなものである。それをトランスチームガンに差し込み、さらに二つのボトルをそれに差した

『B A T』

『G A T L I N G』

「未知の力には対応できない…変身」

『B A D M A T C H』

『闇夜に舞う機関砲獣…B A T G A T L I N G…D E A D…』

その姿はナイトローブの姿を残しながらもわずかに違う

右目にはスコープ、右手首には小型のガトリング、黒と灰色と黄色の装甲

仮面ライダーナイトローブ、バットガトリングフォームである。

「なんだ…それは…そんなフォーム…ナイトローブにはないはずだ!!!」

「甘いなあ…本当に甘い…だからこういう結果になる」

ナイトローグは告げる

「また最初に戻そう、そのためには…お前を消す」  
するとナイトローグは構えながら言つた

「ハイパー・ムテキ程度でオレに勝とうなんて…一万年早いぜツ！」

# 星空、月と太陽と笑う神

どうしよう…

「フハハハハヘハツ!!…………やはり…私は…：神だアアアアアアアアアアアアア！」

この人のこの言葉に僕はどう対応すればいいのだろう  
時間は半日ほど巻き戻る。

アライんと響ちゃんが出会い、一月ほど経つた。

原作とは違い、三人の装者は強くなり。仲もそれなりに良くなつたようだ。

響ちゃんは小日向未来は流れ星を一緒に見るという話をしているんだつたつけ…  
で、僕が今どこに向かっているのかというと。二課の定例ミーティングに向かっている。

装者でもない僕がなぜということだけど。響ちゃんのメンタルサポートと事務的作業のためである。

響ちゃんは慣れない装者としての活動とノイズによるトラウマがあるんじやないか

ということ

知り合いであり、事情を知っている僕がいれば多少マシになるというのは司令談。元々原作よりは精神的にましだし

そして事務作業だけど僕が何もしないでいるのがちょっと居心地が悪くてオペレーターの二人の仕事を少し手伝つたら思つたよりも出来が良かつたらしく。そのまま手が空いた時に手伝つてほしいと言われたので了承

これで情報もそそこ手に入るし二課に深く入り込める。

今は聖遺物についての説明がされているようだ。そばにいる藤堺さんが補足を続ける

「翼さんの天羽々斬や響ちゃんの胸のガングニールのような欠片は装者が歌つてシンフォギアとして再構築させないとその力を發揮できなければ、完全状態の聖遺物は一度起動した後は100%の力を常時發揮し。さらに装者以外の人間も使用できるだろう、と研究の結果が出ているんだ」

「それが！ ワタクシの提唱した櫻井理論！ だけど完全聖遺物の起動には相応のフォニックゲイン値が必要なのよね。」

「…完全聖遺物か…それって使うと響ちゃん達な姿になるんですか？」  
僕がそう藤堺さんに聞くと彼は首を振る。

「いや、完全聖遺物はそのまま武器の形をしたまま使えるものが多いよ。さつき話題に出たデュランダルも剣の形をしているしね」

「…弦十郎さんが使えればとても強くなりそうですよね」

「まあ…そうだね…」

藤堺さんはあははと言つたように苦笑いをする。

それにも話をしていて…

「ノイズと戦っているのに国際問題も気にしなくてはいけないなんて辛いですね…」

「これも仕方のないことなのかもしれないね…」

そんな感じに話をしながら仕事を進めていると…

「調査部からの報告によると、ここ数ヶ月の間に数万回に及ぶ本部コンピューターへのハッキングを試みた痕跡が認められているそうだ。さすがにアクセスの出處は不明。それらは短絡的に米国政府の仕業とは断定出来ないんだ。」

あ…すいません。そのうちの数回は私です、出来るかなあと何故かあるハッキングの知識を使って行いました。

もちろん失敗しましたけど。ここまで内部に入り込めるならしなくてもよかつたなあ…と思つた

その後、ツヴァイウイングの二人と緒川さんはアルバムの打ち合わせで退室。

僕はマネージャーということを知っているが響ちゃんは知らなかつたようではびつくりしていた。

退室時も仲のいいことで二人は手を振りながら笑顔で退室していた…そういえばイギリスの件はどうするんだろ

「私たちを取り囲む脅威はノイズばかりではないんですね」

「うむ、アラインも何かを狙つているようだしな」

「アラインさんもですけど…どこかの誰かがここを狙つてるなんて、あんまり考えたくないかもしれません」

「大丈夫よ。なんてたつてここはテレビや雑誌で有名な天才考古学者櫻井了子が設計した、人類史後の砦よ。先端にして異端のテクノロジーが悪い奴らなんか寄せ付けないんだから」

休憩中に響ちやんが争いについて呟く

うーむ…このことに関してたけど動物同士でも争うし人がいるなら意見が分かれるならそこで争いも…

まあ…これは水掛け論になるか

そんな考え方をしていると櫻井了子が響ちやんの耳を噛む

「ひやあああああっ!」

「あら、おぼこいわね。誰かのものになる前に、私のものにしちゃいたいかも」「ううううう…」

その様子にオペレーターの二人とともに笑う。平和だなあ：  
ちなみにだけど昼にリザイアンに行く予定があつた時にちらつと見えたのだけど  
響ちゃん達の五人グループに天空時恋香が入つていた。仲良くできているようで何  
よりである

そして夕方：僕の携帯にメールが来た

内容は要約すると『ノイズが発生したため家にいること』だそうだ  
その画面を消して携帯をポケットにしまい。辺りを見渡す。

結局、こここのノイズをすべて倒して二人に流れ星を見に行かせようとするのはやめて  
しまつた。

原作に大きなずれが発生してしまうし暴走が起ころのか気にもなる。

それに：何かここから変な気配がする。

ノイズとも違う：なんというのかな…うまく言葉にできないけど。懐かしいという  
か…力を感じるというか…

その瞬間、殺氣を感じたので大きく横に跳ぶ。するとさつきまでいた地点が爆発に巻

き込まれた。

「なにつ!?」

「……」

返答はなく振り返つてみるとエレキギターのような武器を持った。黒と黄色の角を持つた怪物

いや…怪人

「あれは…確か…ゾディアーツ…?」

僕の記憶が正しければあれはカブリコーン・ゾディアーツ。こと座のゾディアーツから覚醒したつて感じだつたはず…こと座流星群だからつて出なくてもいいのに…!  
「つていうかなんでゾディアーツがいるの!?変身ッ!!」

『TYPE TRON』

簡易変身でアラインに変身するとガングンニルを取り出し応戦する。  
ゾディアーツということはスイッチがあるつてこと? そもそもアラインにゾディアーツを倒せるのか…?

そう思いながらゾディアーツに攻撃を仕掛けるが…

「ぐつ…固い…」

圧倒的に火力が足りない…速度はあるから避けることが出来るけど

攻撃が全く聞かない、武器での攻撃を銃での攻撃に変更し牽制している。でもこのままではジリ貧である、いくら撃つても聞いている様子はない。どうすれば…

「ブウハハハハハハアツ!!!」

『CRITICAL END!!』

すると僕の後ろの方から黒い靄を纏つた何かが回転しながらゾディアーツへと向かっていった

その靄はゾディアーツにぶつかるとゾディアーツは吹っ飛ばされて爆発して消滅した。

『GAME CLEAR!!』

それよりも今の音声と技…そしてあの笑い声は…

そして話は冒頭に戻る

「フハハハハヘハハツ!! 本来はコズミックエナジーがなければ倒せないゾディアーツも倒すことが出来るとは…やはり…私は…神だアアアアアアアアアアアアアアア!!」

見ると腰にバグルドライバーを装着している白と黒の装甲。

というかあれ、デンジャラスゾンビ。入つてるのも社長っぽいんだけど

僕が呆然としていると僕に背を向けていたデンジヤラ…もうゲンムでいいか。ゲン

ムはシャフ度のような感じでこちらをぐるりと振り向く

「そして君は二年ほど前から存在が確認されている仮面ライダーだな…確か名前は…ア  
ラインだつたか」

「ツ！」

僕はすぐに戦闘態勢をとるが先ほどのゾディアーツを一撃で倒していたし…勝てない…

「安心しろ、敵意はない。むしろ君とは協力がしたいと思っている」

『ガツシユーン…』

すると変身を解除し…変身者の姿が現れる…すると…

「女の…子…？」

そこにいたのは落ち着いた雰囲気のある黒いセーラー服を着た少女であつた。

# 入店、ラスボスだらけの喫茶店

ゲンムとの邂逅後、その場にいると二課が来る可能性があつたのでその少女とともに移動することになった。

バイクのヘルメットにマイクが付いているタイプでよかつた。

「そういえば君の名前を聞いてなかつたね」

「そうだな、私は佐倉美羽（さくらみう）だ。美羽でいいよ」

「僕は黒野飛鳥。僕も飛鳥でいいよ。体の年齢なんて僕達にはあまり関係無さそどうし」

転生者だしね、もしかしたら年上という可能性もある。

ちなみに僕が変身を解除した時驚かれた。何故だろう

「そういえば今はどこに向かっているの？」

「どある喫茶店、私達のような者が集まっている隠れ家的などころ」

「僕達つて：転生者？」

「そう、君で私を含めて5人目」

そう会話をしながら先行する彼女のバイクについていくと喫茶店に到着した。名前

は…

『n a s c i t a』…？」

「あ、やつぱり知ってるんだ。つていうことはビルド以降の転生者?」  
「え?」

「私はエグゼイドまでの知識しかないんだ。だからその次のビルドは知らなかつたの。  
49のエピソードを聞いたから今は知ってるけど」

と言いながら喫茶店の扉を開ける。

カラソコロンカラソンという音を聞きながら店の中に入るとテレビで見たままの内装  
に内心興奮を隠せない

というか辺りを色々見ちゃう、あの棒を動かすサツカーゲームとかツナ義一ズのポスターとk・ツナ義一ズ!?

…おつと、挨拶もないのは失礼だ。と店内を見渡すと二人の男性と一人の女性。  
あつれえ：何となく雰囲気があるというか…どつかで見たことがあるような…  
するとその三人は懐に手を入れて何かを取り出す。

カウンターに座る外国人っぽい渋い男性が取り出したのはシフトカー、シフトトライドロン

そのそばに座る、クールな女性が取り出したのはロツクシード、レモンロツクシード

バツクル

「あの…もしかして…」

「やあ初めまして。私の名はアドルフ・プレスコット。ここでは『クリム』と呼ばれているよ。43歳、研究職だ」

「あたしの名前は綾峰千里（あやみね ちさと）。ここでは『戦極』って呼ばれるわ。24歳の小説家」

「そんで俺が神代誠一（かみしろ せいいち）。ここでは『マスター』か『神崎』って呼ばれてる。32歳でここマスター」

「そして私が佐倉美羽、17歳の高校二年生だ。ここでは『ゲンム』って呼ばれてる」  
ラスボスだらけ…！一人味方ポジがいるけどほとんどラスボス…！というかベルト開発者ばかり…！」

「あつ…えつと…黒野飛鳥です。20歳の大学生です。よろしくお願ひします」

そういうて札をすると席へと案内され、コーヒーを出されたので一口飲む。

あ、nascitaなのに美味しい。

「さつ、一息ついた所でお話といこうか。君はいつの時代から転生してきたのかな？俺はビルドまでだ」

「あたしはゴーストまでね」

「私は仮面ライダーシリーズを見ていないからいつ頃から分からないがドライブのおもちゃは確認している」

「えっと…僕はビルドの次のジオウまでは記憶していますが…前世の記憶がほとんどなくて…」

仮面ライダーやシンフォギアなどのアニメなどの記憶があるけど

前世の名前、前世で何をしていたか。なぜ死んだか全く覚えてないのだ。

他の人もそうなのかと聞いてみるとそうではないらしく皆細かくではないが記憶はしていた。

クリムさんは80歳後半老衰で、戦極さんは28歳事故で、マスターは30代後半通り魔に、ゲンムは17歳事故で

そしてこの世界に来るときに特典をもらつたそうだ。はじめはとても困惑したらしい。

特にクリムさんは仮面ライダーを知らなかつたからさうに驚いたそうだ。

そしてみんながもらつた特典は『ベルト作成者の知識』ベルトはこの世界で機材を集めてから作成したらしい。

クリムさんとマスターさんが出会い、研究室を作成し。のちに二人が加入してベルト

を作成したのだとか

そこで僕は疑問を持った。コア・ドライビアやヘルヘイムの実、それにミラーモンスター やバグスター ウイルスがなければそれらの変身アイテムは作れなかつたはずだ。なのになぜ

「気づいたか、私も初めて見たときは驚いたが……これを見てくれ」

「え、なに……これって……！」

見せられたのはとあるパソコンの画面。そこに映つていたのはとある山の中の映像  
それしばらく見ていると半透明の靄が発生し、しばらくするとその靄が人型になつていき。怪物の姿となつた。

その怪物はリボルバグスター、完全に姿が現れるとリボルはどこかへフラフラと歩いて行つた。

「そう、バグスターだ。バグスター以外にもロイミュードやミラーモンスター、その他のライダー モンスターが発見されている。私達はこの怪人たちを使いベルトなどを完成させた」

「ちなみに被害はほぼゼロ、ノイズと同じでしばらくすれば自壊して消滅していたわ。」「なんで……今までこんなことなかつたのに……」

頸に手を当ててそう呟くとマスターが言う

「もしかしたら俺らのせいかもしれないねえ」

僕達が視線を向けるとマスターはVバツクルを見せながら言葉を続ける。

「俺達が仮面ライダーとしてこの世界に転生した。ライダーがいるならその敵、怪人も必要になる。世界の修正力っていうんだつけ? ライダーがいるなら怪人もいなくてはならない。みたいな感じにな」

「この世界は確かシンフォギア?と呼ばれるアニメの世界だつたか。その物語にも怪人や他のライダーが参加してくるかもしれないね」

「か、奏さん翼さん…あれって…」

目の前には二年前に失った、ネフシュタンの鎧を着た少女。それと：

「くつ、また別の…」

「ははっ…まつたくどうすればいいんだよ」

奏が困ったように笑うと鎧の少女の隣にいた人物が怒りをにじませるように呟いた。

「今……誰か俺を笑ったか?」